

SLAVIC-EURASIAN RESEARCH CENTER NEWS No. 162 June 2021

研究の最前線

◆ 百瀬基金の設立・百瀬フェローシップの募集開始 ◆

このたびスラブ・ユーラシア研究センターの前身である北大法学部附属スラブ研究施設長（1969-1971）も務められた百瀬宏先生（津田塾大学・広島市立大学名誉教授、白薔薇勲章騎士一級章をフィンランド政府より授与）のご厚意により、百瀬基金設立の運びとなりました。百瀬基金は、1）テニュアを持たない若手ポストドク研究者に対する海外及び国内の研究調査支援を目的とした「百瀬フェローシップ」の活動、2）センターにおける中東欧文献コレクションの構築、3）大学院・学部学生の育成支援などに運用されます。

とくに「百瀬フェローシップ」は、フィンランドを軸とした中東欧の政治や国際関係の研究をされてきた先生のご専門を考慮し、若手研究者の育成支援を狙いとしています。センターにはすでに大学院生を対象とした中村・鈴木基金奨励研究員制度が運用されていますが、そのシニア版とも言えます。ぜひ多くの方々の応募をお待ちしています。[岩下]



百瀬宏先生

◆ 2021年度夏期シンポジウム《不確実性の時代のスラブ・ユーラシア研究：対話と再検討》開催のお知らせ ◆

スラブ・ユーラシア研究センターは今年度の夏の国際シンポジウムを7月5日（月）～7日（水）に開催します。オンラインによる研究会もすっかりおなじみになりましたが、昨年の夏のシンポジウムで成功をおさめ、数多くの研究会を開催してきた実績をもとに、今年もZoomで札幌から世界の研究者をつなぎます。新型コロナウイルスの影響が長引くなか、センターでは現状を冷静に見つめて研究を着実に継続することはもちろん、これまでに築いてきた研究成果や人的ネットワークを生かした様々な新しい取り組みにチャレンジしています。

例年は一人のオーガナイザーが共通テーマを設定してシンポジウム全体を組織してきましたが、今回は岩下・宇山・安達の三名がそれぞれの専門分野で現在特に再検討に値すると思われるテーマを設定し、「ユーラシア地政学」「ロシア外交・国際法」「中央ユーラシア史」「民族問題」「ロシアメディア史」の計5つのセッションを組みました。コロナ禍のため来日できていない2020年度・2021年度外国人研究員をはじめセンターと関わりの深い研究者を招き、多様な視点と方法論によって、過去を再検討し、先の読めない不確実性の時代である現在か

Commentator: David Wolff (SRC)

Registration: https://zoom.us/join/zoom/register/WN_5-o0RAovRdyN0e5TV3PIsw
(contact: Akihiro Iwashita iwasi@slav.hokudai.ac.jp)

17:30–19:00 (Japan Time: GMT+9)

Session 4: Sovereignty and Space: Russia in International Law and Political Geography

Speakers:

Lauri Mälksoo (University of Tartu, Estonia / SRC), “Post-Soviet Eurasia, Uti Possidetis and the Clash between Universal and Russian-Led Regional Understandings of International Law”

Paul Richardson (University of Birmingham, UK), “Imprisoned by Geography? Enduring Geopolitical Myths and Misreading Russia”

Moderator: Edward Boyle (Kyushu University)

Commentator: Yu Koizumi (University of Tokyo)

Registration: https://zoom.us/join/zoom/register/WN_skkPFc6KQUSPxM_79kDTTw
(contact: Akihiro Iwashita iwasi@slav.hokudai.ac.jp)

July 7 (Wednesday)

16:30–18:00 (Japan Time: GMT+9)

Session 5: Reappraisal of Ethnic Issues in the Soviet and Post-Soviet Space

Speakers:

Alexander Osipov (International Centre for Ethnic and Linguistic Diversity Studies, Czech Republic / SRC), “The Soviet Nationalities Policy during and after Perestroika: Was It a Failure?”

Igor Savin (Institute of Oriental Studies, Russia / SRC), “Факторы межэтнических конфликтов в Казахстане в 21 веке”

Moderator: Tomohiko Uyama (SRC)

Commentator: Natsuko Oka (Institute of Developing Economies)

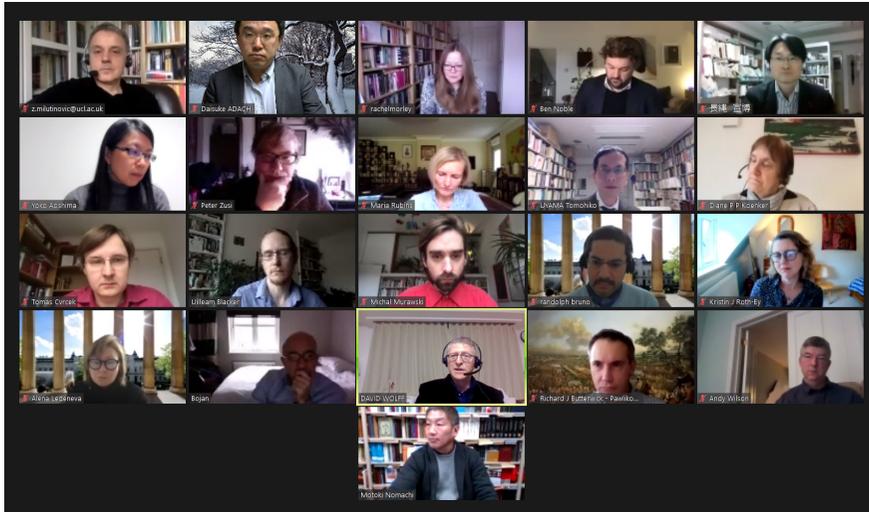
Registration: https://zoom.us/join/zoom/register/tJYsdOGrqDgjG9Jc9_G7J0XYg0vIFiIF_ly
(contact: Tomohiko Uyama uyama@slav.hokudai.ac.jp)

In cooperation with:

- NIHU Transdisciplinary Project “Area Studies Project for Northeast Asia”
- Grants-in-Aid for Scientific Research “Comparative Study of the Rise of Authoritarianism and Populism” (JSPS: 18H03619), “A Comprehensive Study on the Melodramatic Imagination in Russian and Former Soviet Culture” (JSPS: 19H01243) and “Representations of ‘Territory’ and Social Transformation in Northeast Asia” (JSPS: 20H01460)
- Association for Borderlands Studies (Japan Chapter)

◆ ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン スラブ東欧研究学院 (UCL SSEES) との部局間交流協定締結 ◆

スラブ・ユーラシア研究センターは、2020年7月にユニバーシティ・カレッジ・ロンドン スラブ東欧研究学院 University College London, School of Slavonic and East European Studies (UCL SSEES) と部局間交流協定を締結し、共通の関心を有する分野で研究、教育、文化活動をともおこなうことで合意しました。SSEES は 1915 年設立という長い伝統を持つ、イギリスにおけるスラブ中東欧地域の最大の教育研究機関のひとつです。経済、歴史、文学・文化、政治、社会学、語学教育・言語学などの広範な分野にわたって約 80 名の研究者が在籍しています。スラブ・ユーラシア地域研究においてその国を代表する研究所という点で良く似ていますが、SSEES にはロシア・中東欧地域の研究者が多く、センターは東アジアや中央アジアにも強みを持っているので、互いの特長を生かした生産的な協力関係が期待できます。センターにとっては、英語圏またヨーロッパでの研究拠点として強力なパートナーを得ることになりました。

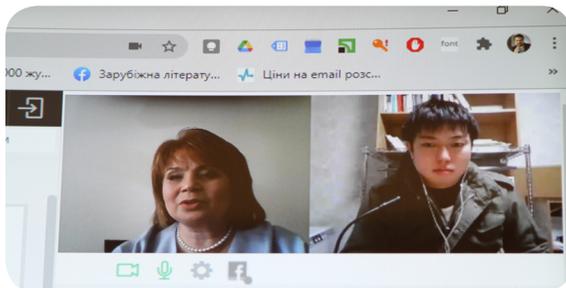


盛会だった3月2日のミーティング

2021年3月2日にはZoomを使って札幌とロンドンを結び、協定の今後の方向性について話し合うミーティングが開かれました。SSEESのダイアン・ケンカー Diane Koenker 学院長を含め計20名以上が出席して、自己紹介と顔合わせのほか、共同での教育研究計画について活発な意見交換がおこなわれました。具体的には、オンラインも取り入れながらセミナーを定期的に開催すること、UCL出版局のFringeシリーズやセンターのActa Slavica Iaponicaなど双方が持つ出版媒体を活用した成果発信をおこなうこと、若手研究者を積極的に支援することなどの提案がありました。今後は共通のプラットフォームづくりを進め、組織的で定期的な交流によって国際的なスラブ・ユーラシア地域研究に貢献します。

この協定を結ぶきっかけとなったのは、SSEESのマリア・ルービンス Maria Rubins 教授が2019年度外国人招へい教員制度(FVFP)によってセンターに滞在したことでした。センターの教育研究、所蔵資料、札幌の環境に大変満足されたルービンス教授は、帰国後にパートナーシップの企画者として、仲介役として大きな役割を果たしてくださいました。ルービンス教授、さらにケンカー学院長をはじめSSEESの皆さんのご協力に厚く御礼申し上げます。[安達]

◆ ポルタワ国立教育大学との国際会議共催 ◆



報告中の上村さんとニコレンコ教授のやりとり

部局間交流協定を結んでいるウクライナのポルタワ国立教育大学英語・世界文学学習法研究教育センターと以下2つの国際会議を共催しました。

2020年11月11-12日、19・20世紀の近代文学をテーマとする『コロレンコ研究会』を、ほかにウクライナ教育科学省、ポルタワ・コロレンコ文学記念館を加えて共催し、安達が組織委員会に入りました。当地で晩年を過ごした作家コロレンコ(1853-1921)を記念するこの会議は11回目を迎えます。今回は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、ぎりぎりまで対面の可能性を探ったものの、オンライ

な形式で開催されました。

ンでの開催を決断せざるを得ませんでした。日本のアカデミアですっかり定着した感のある Zoom ではなく e-Tutorium と Google Meet を使った接続となりましたが、運営に大きな問題はなく、今後 Web 会議によってウクライナと学术交流を進めることができるという確かな手ごたえが得られました。センターからは、安達と博士課程院生の上村正之さんの二名がロシア語で以下の報告をおこないました。

安達大輔「1830-40 年代のロシア文化におけるメロドラマとメロドラマ的想像力（問題提起のために）」https://www.youtube.com/watch?v=ESkGcq_GNH4

上村正之「文学におけるコサックのイメージ:コトリャレフスキーとゴーゴリの作品を例に」<https://www.youtube.com/watch?v=qJuFM0mQmX0>

センター長オリガ・ニコレンコ教授の主催によるセミナーやシンポジウムはいつも参加者の幅が広く、この会議にも教員や学部生 150 人以上の参加がありました。英語での成果発表に熱心に取り組んでいるのが特徴で、そのことは 3 月 30-31 日にやはりオンラインで開催された『第 5 回国際学術実践学生会議：



（中央左）ステパネンコ学長（中央右）ニコレンコ教授 現代の英語による学術言説』でも明らかでした。学部生や院生に英語での発表の機会が与えられるとともに、スペイン、グルジア（ジョージア）、ハンガリーの研究者、さらに日本から埼玉大学の野中進教授らが招かれ、各地での最先端の英語教育の取り組みが紹介されました。センターは共催組織に名を連ねるとともに、安達が報告をおこないました。[安達]

◆ 共同研究員 ◆

2021 年度からセンター共同研究員になっていただく方々は以下の通りです（各カテゴリーの中では五十音順）。[編集部]

共同研究員（一般）

任期：2021 年 4 月 1 日～2023 年 3 月 31 日（2 年間）

秋山徹（早稲田大）、油本真理（法政大）、阿部賢一（東京大）、飯尾唯紀（東海大）、池田嘉郎（東京大）、井潤裕、井上まどか（清泉女子大）、岩崎一郎（一橋大）、岩本和久（札幌大）、上垣彰、植田暁（日本貿易振興機構アジア経済研究所）、海野典子（早稲田大）、大串敦（慶應義塾大）、大塚夏彦（北大北極域研究センター）、大西富士夫（北大北極域研究センター）、大野成樹（旭川大）、岡奈津子（日本貿易振興機構アジア経済研究所）、小川佐和子（北大文学研究院）、小椋彩（東洋大）、小澤実（立教大）、貝澤哉（早稲田大）、加藤有子（名古屋外国語大）、加藤博文（北大アイヌ・先住民研究センター）、加藤美保子（広島市立大）、梶さやか（岩手大）、金山浩司（九州大）、神竹喜重子（日本学術振興会）、亀山郁夫（名古屋外国語大）、河村彩（東京工業大）、木村護郎クリストフ（上智大）、久保慶一（早稲田大）、小松久男（公益財団法人東洋文庫）、小森宏美（早稲田大）、金野雄五（みずほ総合研究所）、左近幸村（新潟大）、佐々木史郎（公益財団法人アイヌ民族文化財団）、佐藤圭史（北海道医療大）、佐原徹哉（明治大）、塩川伸明（東京大）、塩谷哲史（筑波大）、重松尚（東京大）、篠原琢（東京外国語大）、下里

俊行（上越教育大）、白岩孝行（北大低温科学研究所）、新免康（中央大）、杉浦秀一（放送大）、醍醐龍馬（小樽商科大）、高尾千津子、高倉浩樹（東北大）、高橋沙奈美（九州大）、高橋美野梨（北海学園大）、巽由樹子（東京外国語大）、田畑朋子、地田徹朗（名古屋外国語大）、月村太郎（同志社大）、鶴見太郎（東京大）、徳永昌弘（関西大）、鳥山祐介（東京大）、中井遼（北九州市立大）、中澤敦夫（富山大）、中田瑞穂（明治学院大）、中地美枝（北星学園大）、長友謙治（農林水産省農林水産政策研究所）、中村唯史（京都大）、長與進（早稲田大）、沼野充義（名古屋外国語大）、野田仁（東京外国語大）、野中進（埼玉大）、野部公一（専修大）、乗松亨平（東京大）、服部倫卓（一般社団法人ロシアNIS貿易会ロシアNIS経済研究所）、濱本真実（大阪市立大）、林忠行（京都女子大）、番場俊（新潟大）、平田武（東北大）、平松潤奈（金沢大）、廣瀬陽子（慶應義塾大）、樋渡雅人（北大経済学研究院）、福田宏（成城大）、藤澤潤（神戸大）、前田弘毅（東京都立大）、松崎英也（津田塾大）、松里公孝（東京大）、松下隆志（岩手大）、松戸清裕（北海学園大）、溝口修平（法政大）、三谷恵子（東京大）、道上真有（新潟大）、宮崎悠（北海道教育大）、六鹿茂夫（一般財団法人霞山会）、本村眞澄、森下嘉之（茨城大）、八木君人（早稲田大）、湯浅剛（上智大）、横手慎二（慶應義塾大）、吉村貴之（早稲田大）

任期：2021年4月1日～2022年3月31日（1年間）

大武由紀子（北大文学研究院）、岡部起大、古宮路子（東京大）、岡野要（神戸市外国語大）、志田仁完（公益財団法人環日本海経済研究所）、橋本聡（北大メディア・コミュニケーション研究院）、平野恵美子（中京大）、山脇大（国際協力機構フランス事務所）

地域比較共同研究員

任期：2021年4月1日～2023年3月31日（2年間）

秋田茂（大阪大）、伊藤融（防衛大）、小沼孝博（東北学院大）、川島真（東京大）、草野大希（埼玉大）、高本康子、田村容子（北大文学研究院）、松本ますみ（室蘭工業大）、山根聡（大阪大）、吉田修（広島大）、吉田徹（同志社大）

任期：2021年4月1日～2022年3月31日（1年間）

辛嶋博善（大学共同利用機関法人人間文化研究機構）

境界研究共同研究員

任期：2021年4月1日～2023年3月31日（2年間）

安溪貴子（山口大）、石井明（東京大）、今井宏平（日本貿易振興機構アジア経済研究所）、今野泰三（中京大）、北川眞也（三重大）、北村嘉恵（北大教育学研究院）、金成浩（琉球大）、小池康仁（一般社団法人と那国フォーラム）、田村将人（国立アイヌ民族博物館）、樽本英樹（早稲田大）、中居良文（学習院大）、中山大将（釧路公立大）、ブル、ジョナサン エドワード（北大メディア・コミュニケーション研究院）、前田幸男（創価大）、益尾知佐子（九州大）、舛田佳弘（北海商科大）、山崎幸治（北大アイヌ・先住民研究センター）、山本順司（北大学総合博物館）、吉見宏（北大）

◆ 2021年度外国人招へい教員決定 ◆

2021年度の外国人招へい教員（外国人研究員）は、センターおよび北大での二段階選抜を経て5名の方が決まりました（なおマタソビッチさんは新型コロナウイルス感染症拡大の影響を考慮して辞退されています）。新型コロナウイルス感染症拡大の影響で来日できず、今年度に延期となった2020年度採用の4名の方と併せて以下にお知らせします（姓のアルファベット順）。北大での職名は特任教授または特任准教授となります。[安達]

2021 年度

アブドゥラスロフ, ウルファトベク (Abdurasulov, Ulfatbek)

本務機関・現職：ハンブルグ大学文献学センター・ポスドク研究員 (ドイツ)

研究テーマ：ペルシア語圏ユーラシアの新しい外交史 (17・18 世紀)

滞在期間：2021 年 8 月 15 日～2021 年 11 月 15 日

担当教員：長縄

マタソビッチ, ランコ (Matasović, Ranko)

本務機関・現職：ザグレブ大学文学部・教授 (クロアチア)

研究テーマ：スラブ標準語の類型論

滞在期間：辞退

担当教員：野町

オシポフ, アレクサンドル・ゲンナディエヴィチ (Osipov, Alexander Gennadievich)

本務機関・現職：民族・言語多様性研究国際センター・理事、研究員 (チェコ)

研究テーマ：ポスト・ソ連空間における民族間の平等：新しい課題

滞在期間：調整中

担当教員：宇山

オレーニナ, アナ・ヘドバーグ (Olenina, Ana Hedberg)

本務機関・現職：アリゾナ州立大学国際文学文化学部・助教授 (アメリカ)

研究テーマ：セルゲイ・エイゼンシュテインの映画観客理論とプロレトクリトの哲学

滞在期間：調整中

担当教員：安達

ザハロフ, セルゲイ・ウラジーミロヴィチ (Zakharov, Sergey Vladimirovich)

本務機関・現職：国立研究大学高等経済学院人口研究所・副所長 (ロシア)

研究テーマ：21 世紀のロシアおよびいくつかの他の中東欧諸国における出生促進政策の復活

滞在期間：調整中

担当教員：田畑

2020 年度

デブラシオ, アリッサ・ジェイ (DeBlasio, Alyssa J.)

本務機関・現職：ディキンソン大学ロシア学科・准教授、主任 (アメリカ)

研究テーマ：現代ロシア哲学をマッピングする

滞在期間：調整中

担当教員：安達

メルクソー, ラウリ (Mälksoo, Lauri)

本務機関・現職：タルトゥ大学国際法学部・教授 (エストニア)

研究テーマ：ロシアとユーラシアの地域的な国際法

滞在期間：調整中

担当教員：岩下

ラドチェンコ, セルゲイ (Radchenko, Sergey)

本務機関・現職：カーディフ大学法・政治スクール・教授 (イギリス)

研究テーマ：第一声：クレムリンの冷戦、スターリンからプーチンへ

滞在期間：調整中

担当教員：ウルフ

サーヴィン, イーゴリ (Savin, Igor)

本務機関・現職：ロシア科学アカデミー東洋学研究所・上級研究員、中央アジア部門長 (ロシア)

研究テーマ：中央アジアからロシアへの労働移民のアイデンティティ変容要因
滞在期間：2021年9月～2022年2月もしくは2021年10月～2022年3月
担当教員：宇山

◆ 専任・助教・非常勤研究員セミナー ◆

ニュース前号以降、専任研究員セミナーが以下のように開催されました。

専任研究員セミナー

11月30日：長縄宣博

報告：“Officious Aliens: Tatar’s Involvement in the Central Asian Revolution, 1919-1921”

コメンテータ：小松久男（東洋文庫）

提出されたペーパーは、内戦期のムスリムを扱う3部作の一部となるものであり、また、タタール人革命家・外交官であるカリム・ハキモフの伝記を書くという計画の一部でもあるということでした。コメンテータの小松氏は、トルキスタン（主にフェルガナ）とブハラ革命と内戦におけるタタール旅団とその幹部の貢献と苦闘を、アルヒーフや定期刊行物の記事などの一次資料を活用して克明に描き、異邦人・仲介者としてのタタール人活動家の軌跡をたどることによって、中央アジア革命史の知られざる内実を明らかにすることに成功している、と評価されました。討論においても、タタール旅団に関する質問やコメントが多く出され、当事者たちの目的や中央の意図、その役割やムスリム赤軍との関係などについて活発に議論がなされました。タイトルの *Officious Aliens* の意味についても質問が出ましたが、後で聞いたところ、訳すならば、「お節介なよそ者」といったところだということでした。[田畑]

1月20日：ウルフ、ディビッド

報告：“A Soft Steel Curtain : American Foundations, Postwar Occupation Authorities and the ‘Reorientation’ of Slavic Studies in Japan and Western Europe”

コメンテータ：泉川泰博（中央大学）

提出されたペーパーは、センターの設立60周年記念として刊行された *SRC at 60: New Historical Materials and Perspectives* (Slavic Eurasian Studies No. 32, 2017) に収録された報告者の論文を発展させるものでした。以前の論文で扱ったロックフェラー財団による日本における地域研究機関設立へのサポートに加えて、今回は、ドイツなど欧州における同様のサポートをも視野に入れて書き改めたということでした。コメンテータからは、ペーパーの評価すべき点として、冷戦の文化的側面を論じたこと、民間組織（ロックフェラー財団）による国際関係への貢献（ファー博士などのトレーニングを含む）を明らかにしたこと、日本とドイツとの比較をおこなったことなどが挙げられました。個人的には、センター設立の際のロックフェラー財団の役割がさらに明確になったように思われました。討論では、日独の比較から何が分かるか、ロックフェラー財団のねらいは何だったのか、レッド・パージとの関係はどんなものだったかなど、興味深い質問が相次ぎました。[田畑]

3月9日：野町素己

報告：“Connective Negation and Negative Concord in Balto-Slavic” (co-authored by Johan van der Auwera and Olga Krasnoukhova)

コメンテータ：Yaroslav Vladimirovich Gorbachov（シカゴ大学）

今回のペーパーはベルギー出身の著名なバルト語学者 Axel Holvoet 氏の記念論集に投稿されたものです。本稿では、言語類型論で重要なトピックとして議論される否定表現のうち、

英語の *neither A nor B* に該当する構造および組み合わせで用いられる不定代名詞の現れ方のパターンに注目し、それを名詞句、動詞定形、節の異なるレベルで、スラブ諸語とバルト諸語を言語横断的・典型的に分析するものでした。報告者によると、スラブ諸語やバルト諸語研究では当該領域における個別言語での記述はある程度あるが、それには言語類型論的な見方が踏まえられておらず、特にスラブ諸語やバルト諸語のレベルでの類型論的な研究はあまり存在しないので、言語類型論研究者とスラブ語学者の協力による新展開の可能性を示せたとのことでした。コメンテータのゴルバチョフ氏からは、スラブ諸語とバルト諸語は典型的な「否定呼応」言語として知られているが、上記の3つのレベルで分析すると、予想と反し言語発生に基づくグルーピングとは必ずしも一致せず、新たな類型が必要であることが示されたのはスラブ・バルト諸語研究においても言語類型論においても重要な知見であると評価されました。

セミナー出席者は、慣れないテーマだったせいかわかりませんが今回のペーパーに戸惑っていましたが、それぞれの真摯な関心からさまざまな質問が出され、一定の討論がおこなわれました。例えば、バルト・スラブの言語的、歴史的、文化・社会的な一体性に関するものや、本研究のアプローチのスラブ・バルト語研究以外への汎用性などで意見交換がなされました。なお、ゴルバチョフ氏は2019年度に外国人特任准教授としてセンターに滞在しており、Zoom画面を通してですが、センタースタッフも彼もつかの間の再会を喜んでいたので印象的でした。[安達]

3月31日：安達大輔

“Melodrama and Irony in 1830s Russia”

コメンテータ：番場俊（新潟大学）

提出されたペーパーは、ナイーヴな感性に裏付けられていると考えられてきたメロドラマについて、実際にはアイロニーが含まれるのではないかと、という問題提起のもと、メロドラマとアイロニーの定義、フランスのメロドラマのロシアへの受容の過程、受容されたメロドラマに含まれるアイロニーの分析、など多様な内容を含むものでした。特に1830年代にフランスのメロドラマがロシアで上演されるようになると、ロシアのロマン主義の作家たちは、実際の傾向の類似性にもかかわらず、アイロニーの欠如を理由にメロドラマに批判的な態度をとったことが示されました。コメンテータや参加者からは、センチメンタリズム・ロマン主義・メロドラマの境界、メロドラマとアイロニーの分析の大衆文化以前の時代への適応可能性、ロシアとフランスの社会的背景の違いとそれに対応するメロドラマの社会的意義の違い、啓蒙主義的アイロニーとの関係、エモーションとアフェクトの違いなど、多彩な観点から議論がなされました。本原稿は、英文雑誌への投稿を目指すとのことでした。[青島]

4月19日：岩下明裕

報告：「ロシア外交・試論：地政治・アイデンティティ・パワー」

コメンテータ：小泉悠（東京大学）

今回のペーパーは、ロシア・東欧学会2020年度研究大会の共通論題報告をもとにし、雑誌『ロシア・東欧研究』に掲載される予定の論文です。報告者が最近取り組んでいる古典的地政治に対する批判から編み出された方法論によってロシア外交を分析するという、斬新な試みがなされています。対外政策を方向づける「地政コード」として、「大西洋国家」、「ロシア連邦」、「ユーラシア国家」、「旧ソ連」という4つのロシア国家イメージを提示し、プーチン外交において国家イメージとそれに基づくアイデンティティとパワーの発現がどのように変化してきたかを分析しています。また、ソ連・ロシアの国際法学における主権と平和共存の認識や、ソ連・ロシアの歴代外相の回想録に掲載された写真にどの国の要人が写っているかの

分析を補助線として加え、ロシアにとっての日本の位置づけにも触れるなど、盛りだくさんな内容です。軍事専門家であるコメンテータからは、地政治という方法の有効性や、ロシアにとって「中国こそ地政的に自然で不可欠なパートナー」であり「同盟」もありうるという岩下氏の記述の趣旨について質問が投げかけられました。他の参加者からは、2014年（クリミア併合）を境とする変化、岩下氏の長年のテーマである国境研究との関わり、ロシアの自己イメージと他者からのイメージの違い、写真の表象分析の方法など多様な論点について質問・意見が出され、議論が盛り上がりました。[宇山]

助教セミナー

11月17日：諫早庸一

報告：“Geometrizing Chinese Astronomy? The View from a Diagram in the Kashf al-Haqā'iq by al-Nisābūrī (d. ca. 1330)”

コメンテータ：三村太郎（東京大学）

提出されたペーパーは、Brill社が出版する*Overlapping Cosmologies in Asia*と題する専門書に寄稿予定のブック・チャプターの草稿ということでした。内容としては、14世紀のイランの学者ニーサーブリーによるペルシア語天文書『イル・ハン天文便覧の真実の解明』に見える中国天文学を幾何学化する試みを論じたものでした。論文は、テキストクリティークをおこなったうえで、ユーラシア東西の異文化交流、宇宙観の交錯を描くという野心的なものでした。セミナーの前半では、イスラーム科学史を専門とするコメンテータに加えて、ギリシア数学の研究者である斎藤憲氏（大阪府立大学名誉教授）が参加して、テキストクリティークに関わるような専門的で詳細な討論がなされました。後半では、センターの教員から、結果的に中国暦に対して厳しい評価が出たのはなぜか、天文学や暦がイスラームや中国でどのように位置付けられていたのかといった分かりやすい質問が出て、少しほっとすることができました。[田畑]

1月18日：加藤美保子

報告：「ロシアから見るアジアの安全保障アーキテクチャ：世界秩序観の変化に着目して」

コメンテータ：兵頭慎治（防衛省防衛研究所）

提出されたペーパーは、人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究推進事業」の北大拠点の成果をまとめて来年度に出版される岩下明裕編『北東アジア：地域としての未来（仮題）』の原稿として書かれたものでした。内容は、2000年代以降におけるロシアの世界秩序観の変化を跡付け、そのなかで特にアジアの安全保障アーキテクチャがどのようなものになっているかをまとめたものでした。コメンテータからは、公的言説に依拠する方法論の問題、ロシアが米中関係の推移をどう見ているのか、多国間主義と多極世界論の関係などの問題が提起されました。その後の討論のなかでは、安全保障アーキテクチャと言うほどシステマティックなものがあるのかという意見が出たり、その3つの層それぞれの問題が指摘されたりしました。ペーパーのなかで正面から論じているわけではありませんが、日中関係に関する質疑もありました。[田畑]

1月22日：高橋美野梨

報告：“Rethinking the Politics Surrounding the U.S. Military Base in Greenland with a Focus on Non-material Factors”

コメンテータ：鈴木一人（東京大学）

提出されたペーパーは、川名晋史氏（東京工業大学）との共編著としてラウトレッジ社か

ら今年出版された Exploring Base Politics: How Host Countries Shape the Network of U.S. Overseas Bases の第 2 章として収録されたものでした。報告者が昨年このセミナーで報告したペーパーは、やはりこの 1 月に出版された川名晋史編『基地問題の国際比較：「沖縄」の相対化』（明石書店）に収録されていますが、討論のなかではそれと比較するようなコメントも出されました。ペーパーは基地政治を扱ったものですが、日本語のものと同様に、米国のチュレ空軍基地を有する自治領グリーンランドに依存せざるを得ないデンマークが、なぜグリーンランドに対して安全保障面での発言権を増大させるような措置を取ったのかについて議論するものでした。報告者がそれをデンマークの民主主義など、non-material なもので説明しようとしていることについて多くの質問・コメントが出されました。コメンテータはかつての指導教員だったということもあり、3 月にセンターを離れる報告者に対するお別れ会のような「暖かさ」も感じられたセミナーとなりました。[田畑]

3 月 3 日：後藤正憲

報告：「サハの土地改良における変化と持続」

コメンテータ：徳永昌弘（関西大学）

提出されたペーパーは、ArCS II の北極域共同研究のなかで報告者が取り組んでいる研究に関わるものでした。気候変動の影響を強く受ける永久凍土が広がり、降水量が極端に少ないという特殊性を有するサハにおいて、土地改良事業というものがどのようにおこなわれてきたかについて論じるものでした。気候変動問題の議論における人間と自然との二項対立的な見方を批判するなかで、サハにおけるソ連時代の土地改良事業を再評価した点に大きな特徴があるように思われました。討論においては、特に、サハでこのような土地改良がおこなわれるようになった原因、中央アジアなど他の地域における土地改良事業との対比、ソ連崩壊後に生じた変化の要因などをめぐって意見が交換されました。サハの法律を引用しながら論述を進めるスタイルや報告者特有の言い回しや比喩についても、賛否両論の意見が出されました。[田畑]

非常勤研究員セミナー

12 月 10 日：宮崎千穂

報告：「医療警察、感染源追求、非感染証明：ロシア帝国の中央アジアにおける〈梅毒との闘い〉」

コメンテータ：廣川和花（専修大学）

報告者は 19 世紀の梅毒の流行に関わる研究に精力的に取り組んでおり、今回のペーパーは、中央アジアにおけるその流行についてロシア帝国の軍との関係で論じたものでした。中央アジアに展開した軍隊の梅毒対策というのは、一見非常に狭くマニアックなテーマとも思われましたが、これをより広い文脈でとらえたらどうなるかといった観点からのコメントが数多く出され、興味深い議論が展開されたように思いました。特に、ロシア帝国や現地の医療体制、梅毒対策におけるフランス、ドイツ、日本などとの国際比較、中央アジアを植民地と見ることの妥当性、それにも関わる軍と警察の役割あるいは分業、「兵士の妻」に見られるようなロシアの特殊性などをめぐって質問やコメントが出されました。コロナ禍ということもあり、ロシア軍の「後ろ向き調査（さかのぼり調査）」と現在の日本におけるクラスター対策との共通性がコメンテータから指摘されたことも印象に残りました。[田畑]

2021 年 2 月 3 日：中澤拓哉

報告：『モンテネグロは第 3 次世界大戦を引き起こすだろう』：トランプ政権の外交政策とモンテネグロの NATO 加盟問題」

コメンテータ：小山雅徳

今回の論考は、2019年のロシア・東欧学会での報告をもとに論文としてまとめたもので、現在投稿を準備中だとのこと。内容は、モンテネグロのNATO加盟へのプロセス、2016年のモンテネグロでの「クーデター計画」摘発を巡るロシアと欧州の関係、2017年のトランプ政権誕生によるアメリカの対NATO、EU政策の変化とそのモンテネグロ内政・外交への影響など、多くの問題を含んでいます。コメンテータや参加者からは、トランプ政権誕生時にはモンテネグロNATO加盟自体はすでに決していたのではないかとの指摘とともに、「加盟問題」の広がり意識しつつ内実を精査すべきではないかとの指摘がありました。また、「クーデター計画」やDPS政権の評価や取扱、対中関係や対トルコ関係、アドリア海に対するロシアの地政学的関心など、多様な質問やコメントが出されました。[青島]

◆ 研究会活動 ◆

ニュース161号以降、センターでおこなわれた諸研究会活動は以下の通りです。[編集部]

- 11月24日 UBRJ 実社会共創セミナー「稚内からサハリンを語る」 三谷将（稚内市サハリン事務所）、斎藤譲一（稚内市教育委員会）（オンライン）
- 12月11日 第35回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会 ディビッド・ウルフ（センター）「近年における中露関係の分析」（オンライン）
- 12月16日 NIHU 実社会共創セミナー「コロナ VS ツーリズム」 伊豆芳人（ボーダーツーリズム推進協議会）（オンライン）
- 12月21日 4者共催セミナー 田畑伸一郎（センター）、齋藤大輔（ロシアNIS貿易会）、浦田哲哉（北海道サハリン事務所）「新型コロナウイルスの感染拡大とロシア経済」（オンライン）
- 12月23日 客員研究員セミナー 本田晃子（岡山大）「革命と住宅：ソ連映画における住宅表象の分析」（オンライン）
- 1月8日 「権威主義とポピュリズム」 科研研究会 安中進（早稲田大）「COVID-19に対する権威主義国家の優位は本当か？」（オンライン）
- 1月14日 共同研究『『14世紀の危機』に関する文理協働研究：北東アジア地域を突破口として』特別講演会 ユライ・シャミルオグル（ナザルバエフ大、カザフスタン）「ジョチ・ウルスと『14世紀の危機』」（オンライン）
- 1月15日 北海道スラブ研究会 中澤拓哉（センター）「ニュゴシユは『セルビアの作家』か？社会主義ユーゴスラヴィアにおけるベタル2世の『民族化』とモンテネグロの民族問題」（オンライン）
- 1月23日（実社会共創）JIBSN セミナー 共通論題：「境界地域と感染症」；スペシャルセッション：「国境を紡ぐ航路の未来」（オンライン）
- 2月10日 「権威主義とポピュリズム」 科研研究会 鳥飼将雅（東京大・院）「崩壊した支配政党の落とし子たち：ユーロマイダン後のウクライナにおける元地域党所属議員の選挙パフォーマンスと政党帰属」；西川賢（津田塾大）「トランプ主義とアメリカ民主主義」（オンライン）
- 2月19日 「スラブ・ユーラシア地域におけるメディア文化史の共同研究」セミナー アイテン・イグナートワ「草稿から本へ：テキストロギアの課題、シリーズ『文学の記念碑』のためのIO、オレーシャ『羨望』校訂を一例に」（ロシア語）（オンライン）
- 3月2日 UBRJ 実社会共創セミナー 「ボーダーツーリズムの魅力：端っこは面白い」 齊藤マサヨシ（写真家）（オンライン）
- 3月4日 公募研究「スラブ・ユーラシア地域におけるメディア文化史の共同研究」主催セミナー ジェーン・プリチャード（ヴィクトリア・アルバート博物館、英国）「アンナ・パヴロワ：帝室バレエから世界へ」（英語）（オンライン）

- 3月5日 第36回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会 宇山智彦（センター）「日本学術会議事件から見る政治・社会・学問：ユーラシア・欧米諸国を参照しながら」（オンライン）
- 3月6日 集中講義（詳細は諫早氏のエッセイを参照）
- 3月8日 プロジェクト型公募研究「スラブ・ユーラシア地域の鉄道の変革」報告会 松澤祐介（西武文理大）「スラブ・ユーラシア地域の鉄道の変革：趣旨説明」；日臺健雄（和光大）「『一帯一路』に直面するロシアの鉄道：歴史と現状」；井出晃憲（稚内北星学園大）「近年のサハリンにおける鉄道と観光の変革」；松澤祐介「中東欧の旅客鉄道輸送：EU加盟による国内・国境間輸送の変革」（オンライン）
- 3月9日 共同研究班「近現代の中央ユーラシアに関する共同研究」報告会 吉村貴之（東京大）「2つの地域紛争と現代アルメニアの政治」（オンライン）
- 3月10日 NIHU・UBRJ 実社会共創セミナー ファベネック・ヤン（センター）「ロシア漁業管理の過去と現在：極東地域の水産業と日露関係への影響を考える」（オンライン）
- 3月11日 共同研究「戦間期東欧社会の権威主義体制と極右民族主義勢力の分析：グローバル・ファシズムの潮流に注目して」ワークショップ 門間卓也（日本学術振興会／関西学院大）「ユーゴスラヴィア王国における『クロアチア人問題』を巡るプロパガンダ」；姉川雄大（千葉大）「戦間期ハンガリー体制における『政治暴力』と『差別』の問題について」；重松尚（東京大）「1930年代リトアニアのカトリック青年知識人と有機的国家構想」（オンライン）
- 3月15日 客員研究員セミナー 安達祐子（上智大）「ロシアにおける大企業システムの現況と課題」（オンライン）
- 3月21日 プロジェクト型公募研究「19世紀末～20世紀ロシアにおける近代の超克：超越性を中心に」北井聡子（大阪大）「セルゲイ・トレチャコフ『子供が欲しい』における女の欲望」；杉谷倫枝（横浜国立大）「フレイデンベルグの書簡に見られる歴史的・哲学的背景の深化について」；宮川絹代（札幌大）「イワン・シメリョフ『主の年』における色彩と境界」；畔柳千明（東京大）「贈与行為から見た在北京ロシア宗教使節の特色」；居阪僚子（東京大）「北コーカサスにおける『正教復興』」；浜田華練（オックスフォード大、英国）「19世紀ロシアの修道主義復興とキリスト教東方」；細川瑠璃（東京大）「フロレンスキイの思想にみる言葉と越境」（オンライン）
- 3月24日 客員研究員セミナー 東島雅昌（東北大）「カザフスタンにおけるサーベイ実験データの暫定的分析：二頭体制・抗議運動・移民・そしてCOVID-19への市民の認識」（オンライン）
- 4月20日 NIHU・UBRJ 実社会共創セミナー ルルケド薫（フリーランスライター）「パラオの魅力：観光、コロナ、安全保障」（オンライン）
- 4月30日 センターセミナー トマシュ・カムセラ（セントアンドルース大、英国）「多極的ロシア語とロシア新帝国主義の間で」（オンライン）
- 5月11日 ウィルソンセンター・ケナン研究所共催セミナー デイビッド・ウルフ（センター）、ロバート・デイリー（キッシンジャー研究所、米国）、岩下明裕（センター）「近年の中口関係」（オンライン）
- 5月20日 北海道中央ユーラシア研究会 スコット・トリッグ（香港大）「サマルカンド天文台からの学び：イスラム天文書諸写本のなかの図像とともに考える」（オンライン）
- 5月27日 センターセミナー マリア・フリストヴァ（ルイス&クラーク・カレッジ、米国）「ソ連遺産再訪：セミパラチンスク核実験のポスト・ソ連の描写」（オンライン）
- 5月30日 NIHU・UBRJ 実社会共創セミナー&鹿児島大学国際島嶼教育研究センター特別研究会 狩野正一郎（ラ・サール学園）「私の旅した世界の国境」（オンライン）
- 5月31日 「権威主義とポピュリズム」科研研究会 ズィヤ・オニシュ（コチュ大、トルコ）「右派ポピュリズムのグローバル政治経済学」（オンライン）

人事の動き

◆ 研究員の異動／事務職員の異動 ◆

高橋美野梨 助教 2021年3月31日（退職）
 加藤美保子 特任助教 2021年3月31日（退職）
 井上 岳彦 特任助教 2021年5月1日（採用）

〔事務担当係長 2021年4月1日付〕

吉田 哲也 事務担当係長 学務部学生支援課奨学支援担当へ転出
 大久保 恵 事務担当係長 研究推進部産学連携課産学創出・FMI 担当から転入

[事務係]

◆ 2021年度の客員教授・准教授 ◆

公募していました2021年度客員教授、客員教授・准教授は審査の結果、次の8名の方々に
 お願いすることになりました。[事務係]

客員教授

氏名	所属	研究テーマ
Golovnev Ivan	Senior Researcher, Peter the Great Museum of Anthropology and Ethnography «Kunstkamera» the Russian Academy of Science (MAE RAS)	Cinema-Atlas of the USSR as an Experience in Positioning a Multinational State
Suslov Denis	Head, Department of Economic Cooperation in Asia Pacific, Economic Research Institute (Khabarovsk), Russian Academy of Science, Far Eastern Branch	Russian Far East Development: External Conditions and Scenarios
Tsedendamba Batbayar	Research Advisor/Principal Researcher, Institute of History and Ethnology, Mongolian Academy of Sciences	Stalinism and Ethnic Mongolian Territories in the First Half of XX Century

客員准教授

氏名	所属	研究テーマ
塩谷 哲史	筑波大学人文社会系 准教授	19世紀中葉ロシア帝国と中央アジアの関 係史：外交・通商面の分析
中地 美枝	北星学園大学文学部英文学科 准教授	政治と統計学：B. H. スタロフスキー (1905-1975) の役割から考える
Borrero Mauricio	Associate Professor, Department of History, St. John's University	From Judo to Sambo: Vasilii Sergeevich Oshchepkov and the Russian Reception of Japanese Martial Arts, 1910s-1930s
本田 晃子	岡山大学大学院社会文化科学研究科 准教授	ソ連型集合住宅とその映画内表象の研究
吉田 悦章	京都大学大学院アジア・アフリカ地域 研究研究科 特任准教授	ウズベキスタンにおける政府財政行動の 政治経済学的分析：コロナ禍下の現状、 その2008年世界金融危機時との局面比 較、イスラーム国債発行計画を軸とした 対外・国内要因からの実証的接近

中口関係のいま：大国同士の地政学的な駆け引き

ディビッド・ウルフ（センター）

2018年、中国で、カール・マルクス生誕（1818年）の200周年記念大会が開かれた。習近平国家主席は、演説の中で、マルクスが科学技術と経済を重視したおかげで、歴史のなかで中国共産党が進むべき道は明白となった、と強調した。経済の立て直しこそ、中国が、帝国主義の抑圧との長きにわたる闘いの末に、偉大な国に返り咲くために重要なのだ、と言っているのである。そして中国



2019年12月に稼働を開始したパイプライン「シベリアの力」
(www.kremlin.ru)

は、アヘン戦争から180年後のいま、国民総生産（GNP）で世界の頂点になろうとしている。

2009年の経済危機をうまく切り抜けてから特に、中国は、ロシアなどとの二国間関係で、自らの経済力を躊躇なく利用するようになった。2011年からは、中国がロシアの最大の貿易相手国となっている。2010年から2019年には、ロシアの石油輸出に占める中国の割合は、5%から26%に急増した。天然ガスについては、これまでは中国のロシアからの輸入は多くなかったが、今後は大きく増える可能性が高い。2014年、ウラジーミル・プーチン大統領は上海を訪問し、バイカル湖の北から中国国境までの天然ガスパイプライン「シベリアの力（Power of Siberia）」の建設を中心とする、史上最大規模の契約を締結した。中国に天然ガスを送るためだけのパイプラインに、500億米ドルもの建設費用がかかっている。その支払いを清算するには、ロシアは今後何十年も、中国と良好な関係を維持しなければならない。もはやロシアにとって中口の「友好関係」は選択の余地が無いものなのだ。

2014年のウクライナ危機以前、ロシアの対中貿易総額は、対日・対韓貿易を合わせた総額とほぼ変わらなかった。そのため、プーチン大統領には、貿易相手国全体のなかで、中国偏重を避ける余裕もあった。しかし、今や、中国との経済的な結びつきは圧倒的なものとなり、ロシアの対中貿易額は、他の東アジア諸国の2倍を超える。中口両国は、2024年までに、現状をはるかに超える2,000億ドルまで貿易額を増やすことを表明している。とはいえ、中国には、ロシアの代わりとなる石油・天然ガス資源が中央アジアやペルシャ湾にあるが、ロシア側には東シベリアの石油・天然ガスの消費者として、中国に匹敵する代替市場がない。そのため、中口貿易関係では、中国が優位に立っているように見える。

しかしながら、経済から地政に目を向けると状況は大きく異なり、ロシアのほうに中口関係を動かす力がある。中国が南東方面の「核心的利益」を重視しているのは明らかで、日本、台湾、フィリピンからなる、いわゆる第一列島線を超え、南シナ海を完全に中国の影響下に入れようとしている。もはや戦略の次元が新たなものとなっており、中国は、094型原子力潜水艦（晋級）を深海に配備し、第2次攻撃を確実なものとする必要がある。海南島の「戦略原潜」基地に隣接するため、南シナ海を原潜の配備候補地とするのが合理的である。しかし、



ポスター『中国夢』(2013) Landsberger Collection より (<https://chinese posters.net/>)

米海軍の艦艇や無人機が「航行の自由」を守るために、シーレーン（海上交通路）の哨戒活動を継続する限り、それは安全策とは言えない。こうした南方と東方の課題に対処するため、中国には、北方での安全保障が必要となる。そしてそれはロシアの出方次第なのだ。

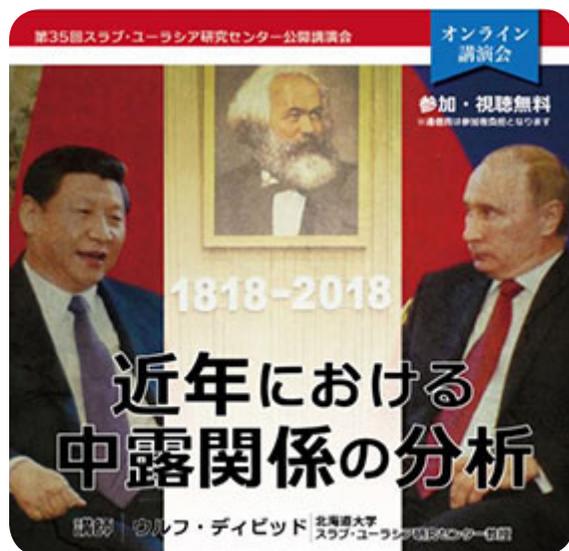
さりとて、地政学的な均衡を図りたいプーチンにとって、米中競争の悪化は好都合だ。プーチン大統領は、2019年のサンクトペ

テルブルク国際経済フォーラムで、米中貿易戦争に関連して、「聡明な猿は山上に座して眼下の虎の戦いを眺める」という、中国のことわざを引用した。近年、ロシア海軍が南シナ海や東シナ海で軍事演習に参加、または係争地に係留し、高性能兵器システムやその技術を販売することで中国の軍事的野心を鼓舞していることに象徴されるように、米国や日本、台湾に対抗する中国の立場を支援することで、米国に「立ち向かう」ようにけしかけているようにさえ見える。

このように、中ロの協調関係はバランスが取れたものであり、経済面では中国がリードし、大国同士の地政学的な駆け引きでは、ロシアが有利な立場にある。しかし、中ロ両国が、地球レベルで、地域レベルで、基本的な戦略的利益を補い合っているだけでない。両国の関係には、要因が他にもあって、安定性がもたらされている。

第一に、中国とロシアは、歴史の教訓に習い、中国東北部・ロシア極東間の国境を越えた関係を凍結してきた。ふたつの地域が本当に発展するには、中ロが共有するアムール川流域を開発するしかない。しかし、一世代にもわたって、地域の開発は停滞している。これが国家レベルでは隠れた成功となっており、1990年代初頭の「黄禍」

危機以来の深刻な緊張が国境周辺で高まることを防いできた。モスクワも北京も、国境を固く管理し、2004年の最終的な国境画定締結の際に生じたような喧嘩を国境まわりで引き起こしたくない。中央アジアで摩擦が起きる可能性も、すぐになくなった。また、新型コロナ



近年における中露関係についてのウルフ教授の2020年12月公開講演会のポスター（ポスターデザイン 笹谷めぐみ）

ウイルス感染症の世界的流行により、人同士の接触が格段に減り、中口国境地域では、不満を漏らしたり連絡を取り合うことが難しくなっている。

第二に、中国が国費で行う歴史研究によって、今後、歴史的な決断を下すうえで重要となる論点が明らかにされる。例えば、豊富な資金が投入され、ソ連共産党が権力を失うことになった経緯が研究されている。それこそ、中国共産党には、最悪のシナリオだからだ。同様に、中ソ同盟や朝鮮戦争に関する研究、翻訳、出版にも、莫大な資金が提供されている。現在の中国が、ロシアとの同盟関係が変化することや、ロシアに騙され中国が破滅的な結果に「陥れ」られる可能性を危惧していることの表れである。スターリンが毛沢東を「誘っ」て朝鮮戦争に参戦させたのは、1950年10月、ほかに選択肢がなくなった時だったのだ。つまり、中口の「パートナーシップ」が「同盟」に格上げされる可能性は低い。

第三に、プーチン大統領と習国家主席は、今後10年以上にわたりそれぞれの国の舵取りをする意向であることが明らかであり、ふたりの個人的な関係が気兼ねないものとなり敬意を示し合っていることが、中口関係に特に安定性をもたらしている。新型コロナウイルス感染症の流行以前は、多国間の会合に合わせて行われるものも含め、年に5回首脳会談を行うのが通例であった。両首脳は、いつも隣り合い、腹を割って言葉を交わす。重要なのは、二人の話の内容がリークされ公になったことが一度もないことだ。不測の事態が起こらない限り、この強力な指導者たちが支配力と洞察力を維持し続け、中口は極めて良好な関係を維持していくはずである。

(翻訳協力：井上岳彦)

* このテーマについてご関心のある方は、Woodrow Wilson Center for International Scholars, Kennan Institute とスラブ・ユーラシア研究センター共催のセミナーで、著者が今年5月に英語でおこなった口頭発表の録画もご覧ください。リンクは下記の通りです。

<https://www.wilsoncenter.org/event/sino-russian-relations-recent-years>

明治・大正期の外国地名表記を訪ねて

中澤拓哉（センター非常勤研究員）

私は旧ユーゴスラヴィア諸国、特にそのうちの1つであるモンテネグロのことを研究しているが、その一環として日本におけるモンテネグロの呼称の歴史の変遷についても調査しており、その成果を査読誌に投稿することを予定している。ここではその成果をいかいつまんで紹介した上で⁽¹⁾、他のスラヴ・ユーラシア地域の諸国が明治・大正期にどのように呼ばれていたのかについても見てみたい。

1. 「モンテネグロ」か「黒山国」か？

「モンテネグロ (Montenegro)」は外名 (exonym) であり、公用語であるモンテネグロ語では「ツルナゴラ (Crna Gora、「黒い山」の意)」と呼ばれる。「モンテネグロ」はその意訳に基づく表記であり、ヴェネツィア人がそのように呼んだことに由来する。

モンテネグロに関する情報は、漢語⁽²⁾ やオランダ語の文献を通して幕末の日本にもたらさ

1 紙幅の都合上、投稿予定の論文と重複する箇所については出典注を省略する。詳細な典拠については論文の発表をお待ちいただくと幸いです。幕末・明治期におけるモンテネグロ像については、拙稿「日本・モンテネグロ関係の濫觴：幕末および明治期における外交と言説」『アジア地域文化研究』17号、2021年刊行予定も参照。

2 現代の漢語圏では、中華人民共和国で「黒山」、中華民国で「蒙特内哥羅」を用いる。

れた。安政年間の漢文地理書には「蒙的尼」という漢字音訳表記がみえるが、これは文久年間にオランダ語新聞が『官板バタビヤ新聞』として邦訳された際に引き継がれている。しかし同時に、同紙では「モンテ子グレイ」などのカタカナ音訳表記も用いられていた。

明治期に入ると、上述の「蒙的尼」だけでなく「蒙的尼古羅」や「門抵尼刻羅」、「猛抵濤苦牢」といった様々な漢字音訳表記が登場する。しかしこれらの表記が定着することはなかった。カタカナ表記は、「モント子グロー」や「モート、ニーグロ」などの表記揺れもあったが、次第に「モンテネグロ」へと収斂していく。

この状況はバルカン戦争期に変わる。多くの新聞で「黒山国」という呼称が用いられるようになったのだ。これは言うまでもなく国名の直訳であり、バルカン戦争期から第一次世界大戦期の報道では頻用されていたが、昭和期に入ると殆ど用いられなくなり、「モンテネグロ」という表記が支配的になった。以後、現在に至るまで、「モンテネグロ」という表記が最も広く流通している。



黒々と木が茂るロヴチェン山麓の風景（2019年、モンテネグロで筆者撮影）

2. 「セルビア」か「セルヴィア」か？

私がかつて留学したセルビアは、公用語のセルビア語では「スルビヤ (Srbija)」と呼ばれる。「セルビア」は英語の呼称 Serbia に基づく外名である。どちらの呼称にも v 音は入ってこないが、一昔前の英文文献では Servia と書かれることも多かった。それに従って、第二次世界大戦以前の日本語でも、「セルヴィア」という表記がみられた。

アメリカの宣教師リチャード・ウェイによる漢訳地理書が幕末の日本で訓点を附して発行された際、監修した箕作阮甫は「塞爾維亞」⁽³⁾とフリガナを振っているが、これは Servia と

3 樽理哲『地球説畧 中巻 歐羅巴大洲之部』老自館、1860年、44頁。ウィリアム・ミュアヘッドの『地理全誌』では、漢字表記は「塞爾維」となっている。慕維廉『地理全志 上篇 歐羅巴志 二』山城屋佐兵衛、1859年、30頁。この漢字表記が日本語に定着し、セルビアを漢字一文字で略すときは「塞」が用いられるようになるが、いっぽうで「撤兒比亞」（『郵便報知新聞』1878年5月2日）のような独自の表記も使われることがあった。

いう表記に影響されているのであろう。明治初期には「セルウキア」（『東京日日新聞』1877年1月11日）という表記もみられた。最終的に日本語での呼称は「セルビア」へと収斂していくのだが、「せるびあ（Servia）」⁽⁴⁾のようにvの入った綴りが原綴として認識されている場合もあった。

3. 「ジョージア」か「グルジア」か？

旧ユーゴスラヴィアからユーラシアの他の国に目を向けると、日本語での国名が論争的になっている国もある。そのうちの1つが、かつて「グルジア」と呼ばれ、現在「ジョージア」と呼ばれている国である（以下、本文ではカルトリ語の呼称 საქართველო に基づき「サカルトヴェロ」と呼ぶ）。

2015年、日本はサカルトヴェロ政府の要請に基づき、同国の公的な呼称を「グルジア」から「ジョージア」へと改めた。これは従来のロシア語読みに基づく呼称から英語読みに基づく呼称に変更するものであり、専門家からは疑問が投げかけられたりもしたが⁽⁵⁾、現在では概ね改名は日本社会に定着しつつあるように思われる。

そして2021年1月初頭、同国の駐日臨時代理大使は、戦前期の公文書に「ジヨルジア」と書かれている事実を提示し、日本ではもともと「グルジア」ではなく「ジョージア」と呼ばれていたのだと主張した⁽⁶⁾。だが、それよりも古い「グルジア」の用例があることは見落とされている⁽⁷⁾。たとえば1895年の書物は次のようにカフカースの民族構成を説明した。

……多数を占むる「アルメニア」人、「グルシア」人、「イメルチア」人、「グリア」人、「ミングレリア」人、「スア子チア」人、「チチエンシア」人、「アウル」人、「ダルジニア」人等は……急激なる同化政策に壓せられ……⁽⁸⁾。

この「グルシア」は、文脈から考えて「グルジア」であろう。イメレティやスヴァネティといった地名が、ロシア語の Имеретия や Сванетия に基づいたと思しき「イメルチア」「スア子チア」という表記になっていることもそれを裏付ける。

また、1902年には文部省の主導によって「外国地名及人名書き方及称え方調査表」が公表された。これは、当時様々な表記が混在していた外国固有名詞に対して統一的な表記の指針を与えようという趣旨のものであり、「外国ノ地名及人名ニシテ我國ニ於テ襲用シタル稱何方アルトキハ成ルベク變更ヲ加ヘズ」「原名又ハ別名ノ顯著ナルモノハ参照トシテ括弧ヲ畫シテ

4 長瀬兼吉纂譯『新體萬國小地理學』精英堂と日進堂、1892年、109頁。

5 前田弘毅「グルジアを英語読みのジョージアにする不可思議」『JBpress』2014年10月23日（URL: <https://jbpress.ismedia.jp/articles/-/42020>。以下、URLはすべて2021年1月31日接続）。「ロシア帝国主義への従属は忌むべきだが、アメリカ帝国主義への従属は歓迎するというのも奇妙な話」という指摘もある。塩川伸明「現代におけるナショナリズムをめぐる状況：いくつかの『ねじれ』」『情況』第4期、4巻7号、2015年、68-69頁、注2。

6 ティムラズ・レジャバ駐日ジョージア臨時代理大使（@TeimurazLezhava）「なぜグルジアからジョージアに？とよく聞かれますが……」『Twitter』2021年1月4日（URL: <https://twitter.com/TeimurazLezhava/status/1346057636563746816>）；『毎日新聞』2021年1月4日。

7 なお、新聞における「グルジア」あるいは「ジョージア」の用例を調べる際には、東トルキスタンのグルジャとの混同に注意する必要がある。各種新聞データベースを「ジョージア」で検索すると、『讀賣新聞』1878年4月20日や『朝日新聞』1880年4月14日といった記事が見つかるが、これらはいずれもイリ地方のグルジャに関する記事である。

8 平田久『露西亞帝國』民友社、1895年、353-354頁。

之ヲ附載ス⁽⁹⁾とされた上で、「Georgia ジョージヤ」と「Georgia (Grusija) グルジヤ」という2つの表記が提示される⁽¹⁰⁾。前者はアメリカのジョージア州で、後者がサカルトヴェロであろう。すなわちこの調査表を見る限りでは、当時の文部省は「グルジア」が「我國ニ於テ襲用シタル稱へ方」であると見做していたということになる。

また、1907年の地理書は、ロシア帝国の母語別人口を「大ロシア（五五六七）、……ヘブレール（五〇六）、リトアニア、等（三〇九）并にドイツ（一七九）、カルトエル（一三五）、アルメニア（一一七）」⁽¹¹⁾と紹介している。この「カルトエル」がカルトヴェリ人を指していることは論を俟たないだろう。

さらに、1910年に在露日本公使館が作成した報告書を見てみると、「後高加索〔ザカフカース〕ノ『グルジン』種族（グリーンツイ人、イメレチーヌイ人、ミングレリツイ人、アプハツツイ人）」⁽¹²⁾への言及が存在する。この「グルジン」は、ロシア語 Грузины に基づくものであろう。このような表記はロシア事情に通じた人びとのあいだでは慣用的に行われていたようだ。たとえば1917年、大庭柯公は著書で「次にはグルジヤとグルジン人に就て述べねばならぬ。……グルジヤ建國の由來は可なりに古い。……グルジン（一にジオルジア Georgians 人は後高加索^{ザカフカース}の中部及西部に占據してをる大民族で……總體の人口は約百五十萬を算する）」⁽¹³⁾と書いた。ここで大庭は「ジョージア」に類する表記を挙げてはいるものの、それはあくまで別称としての紹介に留まっており、本文では一貫して「グルジア」に類する表記を用いている。

もちろん、駐日サカルトヴェロ大使館の指摘するように、「ジョージア」に類する表記も用いられていた。岩倉使節団の記録には「高加索の『ジヨルシアン』語」⁽¹⁴⁾という表記がみえるし、1895年の地理書には「日爾惹國」⁽¹⁵⁾という表記が用いられている。1898年の書物には「ミングレリア、イメルチアン、ゼオルジア地方」⁽¹⁶⁾という表記があるし、同年の別の本は「コーカサス種ニシテジエオルジア、チエルケス等ノ諸族アリ」⁽¹⁷⁾と説明している。また、新聞に連載された旅行記には「ジョージア人」と記されていた（『朝日新聞』1899年8月12日）。しかしこれらの用例は散発的で、完全に定着していたとは言いがたい。つまり「日本ではもともと『ジョージア』表記だった」という理解は誤りであり、「日本ではもともと『グルジア』と『ジョージア』の表記が混在していた」という方が正確である。

ちょうど100年前の1921年3月1日、日本政府は「ジヨルジア」政府を承認することを閣議決定する⁽¹⁸⁾。もしもこのあとサカルトヴェロが独立を維持していれば、もしかすると「ジョージア」が日本語の慣用として定着していたかもしれない。だが現実には、サカルトヴェロはソヴィエト政権によって占領された。翌1922年の公文書には「グルジヤ」の「ソヴェート共和國」への言及がみえる⁽¹⁹⁾。その後も散発的に「ジョージア」表記はみられるが、日本語における慣用表記は「グルジア」で定着することになるのである。

9 稲川竹五郎編『外國地名及人名書キ方及稱へ方調査表』東京地學協會、1902年、1頁。

10 同、16頁。

11 野口保興『世界地理提要』目黒書店と成美堂書店、1907年、379-380頁。

12 外務省外交史料館1-6-1-34、波斯土耳其高架索方面ニ於ケル政治及商工業情況ニ関シ在露大使ヨリ報告一件（JACAR Ref. B03050608400）、1画像目。

13 大庭柯公『露西亞に遊びて』大阪屋號書店、1917年、249-250頁。

14 久米邦武編『特命全權大使米歐回覽實記 第四篇 歐羅巴大洲ノ部中』博聞社、1878年、20頁。

15 田付直男『地理學講義』昌栄社、1895年、250頁。

16 高橋太華『高加索經畧』『東洋戰爭談』北隆館、1898年、8頁。

17 山上萬次郎『新撰大地誌前篇（^{世界之部}）第一冊』富山房、1898年、444頁。

18 外務省外交史料館1-4-3-5_1_004、各国分離合併關係雜件 第四卷（JACAR Ref. B03041291900）、1画像目。告示に際しての表記も「ジヨルジア」であった（『官報』1921年3月14日）。

19 外務省外交史料館2-3-7-0-2_003、巴里平和會議諸條約 第三卷（JACAR Ref. B06150517600）、2画像目。

集中講義「古気候データは歴史研究にどう活用できるか：文理協働の実現に向けて」

諫早庸一（センター）

本稿は、2021年3月6日（土）に行われた中塚武氏（名古屋大学）による集中講義「古気候データは歴史研究にどう活用できるか——文理協働の実現に向けて」の報告記事である。これは、スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究（プロジェクト型）「14世紀の危機」に関する文理協働研究——北東アジア地域を突破口として」（代表者：中塚武）の最終イベントとして行われた。プログラムは以下の通りであった。

【第1講（基礎編）】

講師：中塚武（名古屋大学） モデレーター：諫早庸一（北海道大学）

- 1) 古気候復元の概略と年輪気候学のメリット・デメリット
- 2) 年輪データを使った古気候復元の基本的な方法と注意点

【第2講（実践編）】

講師：中塚武 モデレーター：四日市康博（立教大学）

- 3) 古気候データベースのアクセスとダウンロードの方法
- 4) 古気候データと気象要素の間の「空間相関」の認定

【第3講（応用編）】

講師：中塚武 モデレーター：宇野伸浩（広島修道大学）

- 5) 気候変動の時間スケール（周期性）への視点
- 6) 古文書記録と古気候データの相関——時間解像度の調整

【総合討論】

講師：中塚武 司会：諫早庸一

第1講の冒頭ではまず、古気候学がどのような学問であるのかが述べられた。それは、樹木年輪、サンゴ年輪、鍾乳石、アイスコア、泥炭堆積物、湖沼堆積物、海洋堆積物、古文書などの試料（資料）を使って過去の時代の気候を復元する学問であるとの説明であった。その前提の上で中塚氏が今回の集中講義で伝えたいこととして挙げたのが以下の2点である。1) 歴史研究に活用できる古気候（年輪）データの作られ方・注意点・利用法、2) 人間社会に対する気候変動のパターン、特に（長期平均値ではなく）変動の周期の重要性。まずは、20世紀の古気候データはまさに玉石混交の状態であったことが述べられる。相互に検証しあうシステムは確立されておらず論文は書きっぱなしの状況であり、かつ古気候データの気象学的評価を行う気象・気候学者もいなかった。しかし、そうした状況は21世紀に入って大きく転換していく。その主因が、地球温暖化（への警鐘）であった。地球温暖化予測研究に際して、未来を予測する気候モデル検証のためには、長期に亘って過去に遡る気候・環境のデータが必要であるということが強く認識されたのである。その流れに沿う取り組みの1つとして挙げられたのが PAGES 2k Network である¹⁾。これは全世界の7つの地域において過去2000年間の気温の復元を図ったものであった。それぞれの地域の過去2000年に亘る気候を復元して分かったこととして、1) 20世紀の温暖化は南極以外の世界中で起きていること、2) 一方で、19世紀までは大局的には一貫して寒冷化が進んでいたこと、3) 中世温暖期や小氷期は全世界で一律に起きていたとは言えないこと、4) 大規模な火山噴火や太陽活動極小期には広範な寒冷化が生じていたこと、が挙げられた。

1 <http://pastglobalchanges.org/>

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター公募プロジェクト型共同研究
「14世紀の危機」に関する文理協働研究——北東アジア地域を突破口として」

集中講義 中塚武 (プロジェクト代表: 名古屋大学)

**「古気候データは歴史研究にどう活用できるか
——文理協働の実現に向けて」**

2021年3月6日(土) 10時15分～17時

〈プログラム〉

【第1講(基礎編)】10時15分～12時
講師: 中塚武 モデレーター: 諫早庸一 (北海道大学)
1) 古気候復元の概略と年輪気候学のメリット・デメリット
2) 年輪データを使った古気候復元の基本的な方法と注意点

【第2講(実践編)】13時00分～14時30分
講師: 中塚武 モデレーター: 四日市康博 (立教大学)
3) 古気候データベースのアクセスとダウンロードの方法
4) 古気候データと気象要素の間の「空間相関」の認定

【第3講(応用編)】14時45分～16時15分
講師: 中塚武 モデレーター: 宇野伸浩 (広島修道大学)
5) 気候変動の時間スケール(周期性)への視点
6) 古文書記録と古気候データの相関——時間解像度の調整

【総合討論】16時30分～17時
講師: 中塚武 司会: 諫早庸一

参加方法 (参加無料)
以下の URL またはバーコードから参加登録をお願いします。登録後に Zoom ウェビナーへの接続アドレスをお送りします。
https://zoom.us/webinar/register/WN_josfglpnTiK89f1NtRI9DQ
※オンライン会議ですので、インターネット環境と PC、スマホ、タブレット等があればご自宅やオフィスからお気軽にご視聴いただけます。通信費用は参加者負担となります。

お問い合わせ
諫早庸一 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター (SRC)
yoichi.isahaya@slav.hokudai.ac.jp

参加登録



中塚先生集中講義ポスター

しかし、従来の年輪古気候データには環境変化や数学的処理上の偶然などによって、必ずしもその時期の気候を反映していない可能性があった。それが「気候情報を直接反映するプロキシ」が求められる所以であり、中塚氏の扱う年輪セルロースの酸素同位体比はその希求を満たすものであった。同位体比について、まず同位体とは原子のなかで「陽子の数は同じだが中性子の数が違うもの」のことを言う。酸素の陽子の数は8個と決まっているが、中性子が8個の酸素¹⁶Oと10個の酸素¹⁸Oが存在しており、この¹⁶Oと¹⁸Oの関係が同位体であり、年輪セルロースなどのプロキシに含まれる両者の存在比を酸素同位体比と呼ぶ。一般に¹⁶Oの方が¹⁸Oよりも早く反応・移動して気体になりやすいという性質を持っている。光合成によってセルロースの原料が作られる葉っぱでは、晴れているときには水が蒸発することで¹⁶Oの方が蒸散しやすく、¹⁸Oの存在比が高まり、雨の時はその逆となる。重要なこととして、これらは完全に物理化学的なメカニズムであるため、樹木の種類によらず、その変動パターン

特にアジア地域に関しては、9世紀以降の東アジアの夏の平均気温が年単位で復元されている。復元結果には年輪幅の気温への感度の強い地域(モンゴル、ヒマラヤなど)の気温が主に反映されているものの、それは概して日本の気温変化とも一致している。そこから日本中世における気温と飢饉との関連性を見ていくと、数十年の温暖期の後に気温が急激に低下した時に飢饉が頻発していることが分かる。より詳細に文献データの取れる近世期の気温と飢饉の発生数の比較においても、確かな関係性を読み取ることができ、年輪古気候データと史実とが非常によく合っていることが裏付けられた。

ンは同じ気候変動の影響を受ける地域ではどの樹種でもどの個体でも同じになる。年輪の酸素同位体比 ($\delta^{18}\text{O}$) は広域の夏 (6 ~ 7月) の降水量指標となり、データの比較から中部日本の夏季降水量の変動 (11年移動平均) は、グローバルな「気温」や中国の「降水量」の変動ともよく対応していることが明らかにされている。年輪気候学のデータをユーラシア規模に展開すると、現行の年輪年代学研究を主導するウルフ・ブントゲンは、アルプスとアルタイで取られた年輪データを比較し、中央アジアとヨーロッパとで、夏季の気温について数十年以上の周期変動も含めてよく合致していることを指摘している⁽²⁾。

続く第2講は実践編であった。ここでは、歴史学者がある時代のある地点のある種類 (特定季節の温度・降水量など) の気候変動を知りたいと思った時のためにすべきことがレクチャーされた。具体的な実践としては、まず対象に「近い」地域と種類の古気候データ (気候データに換算されたもの、もしくはプロキシ・データ自体) を検索・取得することになる。それが目的に必要なデータであった場合にはそのまま歴史学的な解析へと進むわけだが、地点・種類の必ずしも「目的のデータ」に対応しない場合には空間相関や気候要素間の相関解析へと進む必要がある。その場合は「古気候データの近現代の部分」および / もしくは「現在の対応する地点・種類の気象データ」と目的とする地点・種類の気象データとの相関関係を分析することになる。相関性が高ければ歴史学的な分析へ、そうでなければ別の「近い」データを検索・取得することになるのである。その例として、先のブントゲンが中央ユーラシア史家のニコラ・ディ・コスモらと書いた共著論文における東突厥滅亡に関わる議論が紹介された⁽³⁾。東突厥が崩壊する630年の直前には「気温の顕著な低下」が見られていたとされるものの、この年代の世界中での信頼できる年輪データ16個のうち、このような傾向が見られたのはアルタイのものをふくむ5つのみであり、それはむしろ火山噴火の影響による気温低下の特徴を強く示しているという議論である。

次に具体的なサイトが紹介された。まずはアメリカ大気海洋局 (NOAA) のホームページである⁽⁴⁾。これは世界の古気候学者がデータを出し合って構成しているサイトであり、ここから気温・降水量・大気循環・表面水温ほか多くのデータセットを取得することができる。中塚氏は試みとして、モンゴル北部の年輪幅からの過去1000年の気温復元のデータを取り出し、それをエクセル・グラフにしてモンゴル帝国の年表との比較を行った。さらもう1つ、スイスの春~夏の気温過去526年分という情報を取り出し、それをオランダ国立気象研究所のデータ解析ページで解析してみる試みも行われた⁽⁵⁾。年月ごとにデータを並べて例えばWavelet解析 (短周期変動の長期変化を示す図) を行うと、日本と同様に18世紀前半に数十年周期の気候変動が顕著であったことが読み解ける。

次に中塚氏自身が提供した中部日本の年輪酸素同位体比データが使用された。それを、このオランダの気象データ解析ページにアップロードすることで、中部日本の年輪 $\delta^{18}\text{O}$ の示すデータがどの範囲の降水量データと相関関係にあるのかが可視化される。具体的には日本の南半分に加えて、長江下流域とも相関関係があり、内陸部黄河流域に対しては、その関係は逆相関となっている。ちなみに中世温暖期 (1000 ~ 1300年) と小氷期 (1400 ~ 1900年)

2 Ulf Büntgen, Vladimir Myglan, Fredrik Ljungqvist *et al.*, "Cooling and Societal Change during the Late Antique Little Ice Age from 536 to around 660 AD," *Nature Geoscience* 9 (2016): 231-236. <https://doi.org/10.1038/ngeo2652>

3 Nicola Di Cosmo, Clive Oppenheimer & Ulf Büntgen, "Interplay of Environmental and Socio-Political Factors in the Downfall of the Eastern Türk Empire in 630 CE," *Climatic Change* 145 (2017): 383-395. <https://doi.org/10.1007/s10584-017-2111-0>

4 <https://www.ncdc.noaa.gov/data-access/paleoclimatology-data>.

5 <http://climexp.knmi.nl/start.cgi>

との比較においては、長江下流域と黄河流域との間で夏の降水量には逆相関の関係がある。かつ、アジア高地に沿うモンスーンの北限を境に、中世温暖期においてはモンスーン地帯である東部が湿潤、偏西風地帯である西部が乾燥という関係になり、小氷期においてはそれが逆になる。古気候復元やその歴史学的応用に際しても、現在の気象観測データに基づく地域相関性などを知っておくことが肝要であることが指摘され、第2講の幕が下ろされた。

最終の第3講は応用編であり、実際に古気候データを用いての歴史学的分析の実例が示された。まず中塚氏が取り上げたのは日本史のなかでも平家の興亡であった。保元の乱(1156年)から壇ノ浦の戦い(1185年)までの30年は、戦乱の中世を特徴づける激しい数十年周期の気候変動の〈最初の大波〉のなかでのことであった。それは当時の人々が経験したことのなかった、大きな農業生産の上下動をもたらした可能性がある。これに限らず、夏の気温の変動と歴史的な「大飢饉」との関係を見ていくと、数十年に亘ってつづいた温暖期の直後の寒冷期に「大飢饉」が発生している。これは、平安時代から江戸時代まで続く前近代社会の「不変の法則」であるようにも思われるのである。これを基に中塚氏は、数十年という人の寿命に対応する年数こそが、「予測」が難しく「対応」もし難い気候変動周期であるという作業仮説を立てる。温暖な気候のなかでそれに見合った人口拡大という「過適応」が為された後にこそ、それに数十年周期の気候変動が続いた場合に大きな被害をもたらすという仮説である。これは人間社会がそもそもどのような気候変動に対して最も脆弱なのかという、これまできちんと議論されてこなかった重要問題にメスを入れるものとなっている。

これまでも示されてきた中部日本の樹木年輪の2600年間の酸素同位体比データを見ると、16～32年および32～64年周期での気候変動の振幅が拡大する時代が多く見られる。それはおおよそ400年に1度の割合で訪れている。こうした「数十年周期」の変動に着目すると、その振幅拡大の時期がいずれも中国王朝交替のサイクルや日本の政治体制の転換期にあっていると中塚氏は主張する。例えば「14世紀の危機」の時代もこうした振幅が増大した時代であり、それは元朝が倒れ、南北朝の戦乱が起っていた時代なのである。日本と中国のデータは、16～64年周期の気候変動の振幅と、双方の地域で発生した単位年当りの内乱の件数の間に有意な相関があることを示している。一方でそうした内乱の頻発が日本では鎌倉幕府を滅亡に導いた時代において、中国では内乱はやや少なく、むしろその次の振幅拡大期において内乱と王朝の滅亡が起っている。このように数十年周期の気候変動と社会変化との関係は、時代間・地域間で多様性がある。その一方で数十年周期変動の振幅拡大のタイミングは世界の多くの地域で同調を見せており、それがグローバル・ヒストリー研究の新たな切り口となる可能性を中塚氏は指摘した。そして例えばマイケル・マンの研究によれば、14世紀は、最も平均気温の数十年周期変動が激しい時期なのである⁽⁶⁾。

数十年周期の気候変動の振幅が、数百年の間隔で拡大していたことが各地のデータから明らかになっており、それは14世紀を含む世界各地での社会体制の転換のきっかけとなってきた可能性がある。こうした観点からグローバル・ヒストリーを描くことができる可能性を十二分に示して、中塚氏は集中講義を終えた。当日は90名もの方々に御参加いただくことができた。当プロジェクトに協力して下さった全ての方々はこの場を借りてあつく御礼申し上げる⁽⁷⁾。

6 Michael Mann, Zhihua Zhang, Malcolm Hughes *et al.*, "Proxy-Based Reconstructions of Hemispheric and Global Surface Temperature Variations over the Past Two Millennia," *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America* 105/36 (2008): 13252-13257. <https://doi.org/10.1073/pnas.0805721105>

7 なお、この共同プロジェクト自体は昨年度で終了したが、「14世紀の危機」研究に関しては、科学研究費助成事業基盤研究Bの枠組みで、今年度より新プロジェクト『14世紀の危機』についての文理協働研究(代表者: 諫早庸一)が発足している。

学 界 短 信

◆ 学会カレンダー ◆

- 2021年6月4-6日 比較経済体制学会第61回全国大会 オンライン開催 <http://www.jaces.info/info.html>
- 6月26-27日 日本比較政治学会第24回研究大会 オンライン開催 <http://www.jacpnet.org/convention/>
- 7月5-7日 スラブ・ユーラシア研究センター 2021年度夏期国際シンポジウム オンライン開催
- 8月3-8日 ICCEES (International Council for Central and East European Studies) 10th World Congress オンライン開催 <https://iccees.org>
- 10月14-17日 21st CESS (Central Eurasian Studies Society) Annual Conference 於オハイオ州立大学 (オンライン併用) <https://www.centraleurasia.org/conferences/annual/>
- 10月16-17日 2021年度ロシア・東欧学会研究大会 於大阪大学箕面キャンパス <https://www.jarees.jp>
- 10月23-24日 ロシア史研究会 2021年度大会 オンライン開催 <https://www.roshiashi.com>
- 10月29-31日 日本国際政治学会 2021年度研究大会 開催地検討中 (初日はオンライン) <https://jair.or.jp/event.html>
- 10月30-31日 日本ロシア文学会第71回全国大会 オンライン開催 <http://yaar.jp.org>
- 11月6日 2021年度内陸アジア史学会大会 於神戸大学 <http://nairikuajia.sakura.ne.jp/SIAS/events/index.htm>
- 11月18-21日、12月2-3日 53rd Annual ASEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) Convention 於ニューオーリンズ (11月) およびオンライン (12月) <https://www.aseees.org/convention>

現時点で対面開催の予定となっている学会も、オンラインに変更される可能性があります。各学会のウェブサイトでご確認ください。

大学院だより

北海道大学大学院文学院人文学専攻スラブ・ユーラシア学講座には、修士課程3名と博士課程4名の入学がありました。今年度の大学院生は以下の皆さんです。[青島]

2021年度スラブ・ユーラシア学講座大学院生名簿

学年	氏名	研究題目	指導教員	副指導教員	
D3	小野瑞絵	旧ソ連圏におけるイスラーム教育と政策の比較	宇山	長縄	仙石
D3	寺岡郁夫	ウクライナの構成地域とその形成過程	岩下	宇山	田畑

D3	林健太	ピョートル1世時代の官僚出版業と国家出版言語	長縄	野町	安達
D3	ベクトゥルスノフ・ミルラン	ソヴィエト・キルギスの形成：中央政権と現地人エリートとの関係を中心に	宇山	長縄	ウルフ
D3	中尻恒光	ロシアにおけるマクロ経済政策（ポリシー・ミックス）に関する研究	田畑	仙石	岩下
D3	アントネンコ・ヴィクトリア	19世紀と20世紀におけるサハリンと日本との経済関係	ウルフ	田畑	長縄
D3	上村正之	1800-30年代ロシア文学におけるコサック表象の変遷	安達	宇山	野町
D2	長島徹	ロシアの国籍政策	岩下	宇山	田畑
D2	布日額（ボルジギン・ブレン）	清朝末期モンゴルのナショナリズムと日露両帝国（1900-1912）	宇山	ウルフ	長縄
D1	新井洋史	北東アジアにおける国際協力を通じた地域開発政策	田畑	岩下	仙石
D1	王雨寒	中国と中央アジアの文化交流に関する考察	宇山	長縄	岩下
D1	金盾	中ロ両国における日系小売業の発展に関する比較研究	田畑	岩下	仙石
D1	鄭米芝	競争的権威主義と体制の安定性：プーチン政権下のロシアを中心に	宇山	仙石	岩下
M2	松元晶	映画にみるウズベキスタン	宇山	安達	
M2	王釗	ロシアの自動車産業	田畑	仙石	
M2	小太刀雄海	19世紀末フェルガナ盆地の綿花栽培とその政治的背景：旅行記を中心に	宇山	長縄	
M2	蔣政倫	2015年以降ロシア極東における経済特区について	田畑	仙石	
M2	費宇澄	ゴルバチョフの経済改革と鄧小平の経済改革の比較について	田畑	仙石	
M2	陳屹文	ガスパロム・グループにおける資金管理について	田畑	仙石	
M2	辻本玲央	16-17世紀モスクワ国家辺境における修道院の機能	長縄	野町	
M2	李暢	1920年代の満洲におけるロシア人	長縄	ウルフ	
M1	荒濤理沙	ヤン・コラルの汎スラヴ主義思想から見る19世紀中東欧における民族言語像	青島	ウルフ	野町
M1	ウツォワ・マリア	極東ロシアの官民パートナーシップへの北海道の経験の適用	田畑	岩下	
M1	三栖大明	レフ・グミリオフの思想における「スーパーエトノス」概念の分析	青島	宇山	
研究生	許雯慧	ロシアの中央と地方財政管理体制	田畑	仙石	

編集室だより

◆ ACTA SLAVICA IAPONICA ◆

現在 42 号を編集集中です。次号の投稿締切は 7 月 18 日(日)です。ふるってご投稿ください。
[野町]

◆ EURASIA BORDER REVIEW ◆

2020 年秋に *Eurasia Border Review* Vol. 11, No. 1 が発行されました。[編集部]

Begining our Second Series

<Article>

Jarosław Jańczak Re-boarding in the EU under Covid-19 in the First Half of 2020: A lesson for Northeast Asia?

Q & A

◆ 『境界研究』 ◆

2021 年春に『境界研究』No. 11 が発行されました。[編集部]

≪論文≫

木村護郎 クリストフ 異言語間コミュニケーション方略としての言語混合：ドイツ・ポーランド国境地域の事例から

水谷裕佳 ハワイにおける海と陸の境界域の諸相：ワイキキ地区の自然環境、サーフィン、ホームレス問題を通じた考察

≪研究ノート≫

山崎直也 金門島スタディツアーを設計する：台湾研究のアウトリーチの一方法として

≪特集≫

地政学ルネサンスを超えて：地理学と政治学の対話 ラウンドテーブル『現代地政学事典』（丸善、2020）パネリスト 高木彰彦、山崎孝史、古川浩司、香川雄一、川久保文紀、北川眞也

≪書評論文≫

福原裕二 濱田武士、佐々木貴文著『漁業と国境』

≪書評≫

五十嵐元道 リチャード・フォーク著『パワー・シフト：新しい世界秩序に向かって』

中山大将 川喜田敦子著『東欧からのドイツ人の「追放」：20世紀の住民移動の歴史のなかで』

会 議 (2021 年 4 月～5 月)

◆ センター協議員会 ◆

2021 年度第 1 回 4 月 13 日(火) [オンライン開催]

議題

1. 教員の選考（特任助教）について
2. 大学間交流協定の更新について

2021年度第2回4月14日(水)～16日(金) [オンライン開催]

議題

1. 教員の人事について

[事務係]

誰が何をどこで

2020年度(4～3月)の専任研究員、助教、客員教員、非常勤研究員、学術研究員の研究成果・研究余滴のアンケート調査(提出は任意)を以下のようにまとめました。[五十音順][大須賀]

青島陽子 ① 1 学術論文 ▼ロシア帝国：陸の巨大帝国と「不可分の国家」像『歴史学研究』1007: 156-162 (2021.3) ② 3 著書 ▼(編) *Entangled Interactions between Religion and National Consciousness in Central and Eastern Europe* (Boston, MA: Academic Studies Press, August 2020) ③ 4 その他業績(著書形式) ▼(教科書)(シュラトフ・ヤロスラフ、中野悠希と)『ロシア語の世界へ! : 一初心者の旅—Мир русского языка: путешествие для начинающих』104 (朝日出版社, 2021) [https://text.asahipress.com/others/detail.php?id=17] ④ 5 学会報告・学術講演 ▼ロシア帝国：陸の巨大帝国と「不可分の国家」像 歴研大会・合同部会シンポジウム, 主権国家再考 Part3: 帝国論の再定位 (2020.11.29) (オンライン) ▼20世紀初頭における対ポーランド政策：教育政策に見るリベラルと保守, ロシア史研究会大会<共通論題B>「ロシアとポーランド」(オンライン) (2020.11.15)

安達祐子 ① 1 学術論文 ▼(岩崎一郎と共著) 現代ロシアの企業システムと産業組織『上智大学外国語学部紀要』55:1-35 (2020) ② 2 その他業績(論文形式) (5) その他 ▼ロシア巨大企業システムの現況と課題, 北海道大学スラブ・ユーラシア研究所客員研究員セミナー (2021.3.15) ③ 5 学会報告・学術講演 ▼Business-State Relations and Russia-Style State Capitalism under Putin, Round Table/Discussion Series, 1991-2021: Thirty Years After CBEEs, Soderton University, Sweden (2021.3.22)

安達大輔 ① 1 学術論文 ▼Язык и поэтика Гоголя в трудах В.В. Виноградова по истории русского литературного языка (Грамматика в обществе, общество в грамматике: Исследования по нормативной грамматике славянских языков, 99-124, М.: Издательский дом ЯСК, 2021) ▼音楽の後に: ゴーゴリの詩学におけるリズムの問題へ向けて『SLAVISTIKA』(沼野充義教授退職記念号) 35:169-184 (2020) ② 2 その他業績(論文形式) (2) 研究ノート等 ▼(野町素己、小川佐和子、白山利信と) Recent Trends and Advancements in Slavic Studies in Japan, *Slavic and East European Journal*, 64(1):2-12 (2020) (3) 書評 ▼大平陽一、新井美智代編訳『子どもたちの見たロシア革命: 亡命ロシアの子どもたちの文集』松籟社 (2019) 『スラヴ学論集』23:131-135 (2020) (5) その他 ▼(Евгений Добренко、貝澤哉、平松潤奈、中村唯史と) Секция «Процессы культурного строительства в России и СССР в свете работ Евгения Добренко» 『ロシア語ロシア文学研究』52:351-362 (2020) ▼(八木君人、梅津紀雄、伊藤倫、大平陽一と) 第69回全国大会・パネル「ロシア・アヴァンギャルドのサウンドスケープ」報告『ロシア語ロシア文学研究』52:326-333 (2020) ③ 5 学会報告・学術講演 ▼Melodrama and Irony: A Short Introduction, The 5th International Scientific Practical Student Conference “The Contemporary English Scientific Discourse,” Poltava V. G. Korolenko National Pedagogical University (Zoomによるオンライン) (2021.3.30) ▼1830年代ロシアにおけるメロドラマ、メロドラマ的なものとアイロニー, 科研費基盤研究(B)「ロシア・旧ソ連文化におけるメロドラマの想像力の総合的研究」第2回研究報告会 (Zoomによるオンライン) (2021.3.10) ▼Мелодрама и мелодраматическое в русской культуре тридцатых – сороковых годов XIX века (к постановке проблемы), Міжнародна науково-практична конференція XI Королєнківські читання, Полтавський національний педагогічний університет імені В.Г. Короленка (e-Tutoriumによるオンライン) (2020.11.11) ▼1830-40年代ロシアのメロドラマ研究のために, 科研費基盤研究(B)「ロシア・旧ソ連文化におけるメロドラマの想像力の総合的研究」第1回研究報告会 (Zoomによるオンライン) (2020.9.23)

諫早庸一 ① 1 学術論文 ▼Fu Mengzhi: “The Sage of Cathay” in Mongol Iran and Astral Sciences along the Silk Roads (M. Biran, J Brack & F. Fiaschetti, eds., *Along the Silk Roads in Mongol Eurasia: Generals, Merchants, and Intellectuals*, 238-254, Berkeley: University of California Press, 2020) ▼From Alamut to Dadu: Jamāl al-Dīn’s Armillary Sphere on the Mongol Silk Roads, *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, 74(1): 65-78 (2021) ② 2 その他業績(論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼13-14世紀アフロ・ユーラシアにおけるベストの道『現代思想』48(7):137-144 (2020) (3) 書評 ▼足立孝『辺境の生成: 征服=入植運動・封建制・商業』(名古屋大学出版会, 2019年) 『北大史学』60: 47-54 (2020)

(5) その他 ▼環境と社会のあいだ:ワークショップ「前近代ユーラシア東西における気候変動と社会」報告記『スラブ・ユーラシア研究センターニュース』161:8-11 (2020) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼グローバルに文化を問うこと: 図について東西の天文学を例に, 中央大学学術シンポジウム「グローバル文化史の試み」主催公開研究会, 中央大学 (オンライン) (2020.9.15) ▼A Cross-Cultural “Astronomical Dialogue” between a Muslim Polymath and Chinese Sage in Thirteenth-Century Eurasia, Seminar Series at the Institute for Medieval Studies, University of Leeds (Online) (2021.2.9) ▼From Alamut to Dadu: Birūnī on the Mongol Silk Roads, Symposium on Calendars Used in Asia (West-, South-, Southeast-, East-) and Oceania, National Astronomical Observatory of Japan & Nanzan University (Online) (2021.3.16)

岩下明裕 ㊦ 1 学術論文 ▼ソ連/ロシアの対中・対日外交から学ぶべき教訓『国際政治』201:17-32 (2020) ▼(with Edward Boyle) Bordering and Scaling Northeast Asia, *Asian Geographer* 38 DOI: 10.1080/10225706.2021.1894189 ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼Bested by Russia: Abe’s Failed Northern Territories Negotiations, *Kennan Cable* 60 (November 2020) ▼(高木彰彦他と) 地政学ルネサンスを超えて (ラウンドテーブル)『境界研究』11:55-84 (2021) (5) その他 ▼はしがき (ルルケド薫他『知っておきたいパラオ: ボーダーランズの記憶を求めて』北海道大学出版会, 2020) ▼日本はロシアに見下げられた: 安倍政権が「北方領土交渉」で失ったもの『現代ビジネス』(2020.9.26) ▼ボーダーから奄美を考える『南海日日新聞』(月1回連載: 2020.5-2021.3) (全11回) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ロシア外交・試論: 地政治・アイデンティティ・パワー, ロシア東欧学会 (オンライン) (2020.10) ▼Global Perspectives “Japanese-Russian Unbalanced Relations: Expectation and Reality from Abe to Suga” ケナン研究所 (オンラインセミナー) (2020.10) ▼グローバル関係学における境界化現象の総合的研究, 「グローバル関係学」公募研究者報告会 (オンライン) (2021.2)

宇山智彦 ㊦ 1 学術論文 ▼ペレストロイカ期中央アジアにおける共和国の自立と民族問題の関係: 「政治の場」の浮上と遠心化・多様化『国際政治』201:98-113 (2020) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼中央アジアに見る中華「現在」主義『表現者クワイテリオン』90:98-102 (2020.5) ▼超大国ソ連の遺産と中央アジア諸国の現在『歴史地理教育』911:10-15 (2020.7) ▼人民の要求か、裏切られた革命か: クルグズスタン (キルギス) の 2020 年政変『スラブ・ユーラシア研究センターニュース』161:11-16 (2020) ▼中央アジアから見た米中関係: ピントを外し続ける米国、重要だが親近感は増さない中国 (米中関係研究会コメンタリー No. 6), 中曽根平和研究所ウェブサイト (2021.3.18) ▼ロシアと中国の地域主義から再考する勢力圏・影響圏: 国力・関与・共感 (日本国際フォーラム「ユーラシアダイナミズムと日本外交」分科会 2020 年度報告書, 2021.3.31) (2) 研究ノート等 ▼Теория заговора мешает пониманию сути вопроса: по поводу статьи Владимира Шварца «Высочайшее повеление от 25 июня 1916 года - документ двойного назначения» (*Изучение 1916 года: деполитизация и гуманизация знаний о восстании в Центральной Азии*, под ред. Александра Моррисона и Гульнары Айтпаевой, 397-408, Бишкек: Maxprint, 2020) (5) その他 ▼日本中央アジア学会大会オンライン開催顛末記『スラブ・ユーラシア研究センターニュース』160:16-19 (2020) ▼«Абай деген адам өмір сүрмеген»: Батаевага жапон галымы жауап берді, *KzNews.kz* (2020.7.30) ▼比較政治学における中央アジア研究の成果・可能性・課題 (特別連載 インタビューで知る研究最前線第2回)『アジア経済』61(3):62-67 (2020) ▼日本型アカデミーとしての「学術会議」に誇りを『東京新聞』TOKYO Web (2020.12.22) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼中央アジア諸国の権威主義体制, シンポジウム「権威主義体制の比較: 多様性と共通性」, 東京大学先端科学技術研究センター (オンライン) (2020.11.2) ▼勢力圏の囲い込みか、開かれた地域主義か: 権威主義諸国主導の地域協力をめぐって, 比較経済体制学会全国大会共通論題 (オンライン) (2020.11.28) ▼Изучение истории Казахстана в Японии на основе материалов из АП РК, Круглый стол «Рухани жангыру: деятельность Архива Президента РК в популяризации знаний о Казахстане», Архив Президента Республики Казахстан (オンライン) (2020.12.14) ▼Империя как вдохновитель диалога и препятствие ему: уроки истории, Международная научная конференция «Диалог культур Востока и Запада через призму единства и многообразия в преемственности и модернизации общественного сознания», Институт философии, политологии и религиоведения КН МОН Республики Казахстан (オンライン) (2021.3.25)

ウルフ・ディビッド ㊦ 3 著書 ▼(共著) 大豆: 成長し変容する世界の市場 (桃木至朗、中島秀人共編『ものがつなぐ世界史』[MINERVA 世界史叢書5], 271-290, ミネルヴァ書房, 2021) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼A Soft Steel Curtain: American Foundations, Postwar Occupation Authorities and the “Reorientation” of Slavic Studies in Japan and Western Europe, Cold War Seminar on Zoom hosted by Cardiff University, Wales, England (2020.6.10) ▼A Swing of the Pendulum: East and West and the Russian Far East in Modern Russian History (Keynote Speech for Conference on “The Russian Far East:

Regional and Transnational Perspectives, 19th-21st Centuries”) sponsored by the German Historical Institute Moscow and the Russian Academy of Sciences Far Eastern Branch (2021.3.29)

加藤美保子 ❶ 1 学術論文 ▼ Competing Sovereignties: Increasing Tensions over Maritime Border in Northeast Asia, “*Pathways to Peace and Security*, 58(1):63-77 (2020) [https://doi.org/10.20542/2307-1494-2020-1-63-77] ❷ 2 その他業績(論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ 中口関係の行方に関する一考察『ポストーク』[NPO 法人ロシア極東研機関誌] 41:5-8 (2020) ❸ 5 学会報告・学術講演 ▼ Competing Sovereignties in Northeast Asia, 2020 SRC Summer Symposium “Northeast Asia: Pitfalls and Prospects, Past and Present,” Hokkaido University (ZOOM)(2020.7.2) ▼ プーチンのロシアと東アジア, 慶應義塾大学韓国国際交流財団寄附講座「朝鮮半島と東アジア国際政治」(ZOOM 録画配信)(2020.12.16)

後藤正憲 ❶ 1 学術論文 ▼ 適応のかたち：サハの在来家畜と環境『北方人文研究』14:85-102 (2021) ▼ (coauthored with S. Tabata, N. Otsuka, M. Takahashi) Economy, Society and Governance in the Arctic: Overview of ArCS Research Project in the Field of Humanities and Social Sciences (2015-2020), *Polar Science*, 27:100600 (2021.3) [https://doi.org/10.1016/j.polar.2020.100600] ❷ 2 その他業績(論文形式) (5) その他 ▼ (coauthored with S. Boyakova, O Habeck) The Impact of the Soviet Union Dissolution on Villages (Hiroyuki Takakura et al., *Permafrost and Culture: Global Warming and the Republic of Sakha (Yakutia), Russian Federation* (Study Guide for Environmental Education) [Center for Northeast Asian Studies Report, 25:39-41 (2019) ▼ Пространства и их названия в поэзии Г. Айги (сост. и отв. ред. И.Ю. Кириллова, *Поэтическое и культурное пограничье/безграничье творчества Геннадия Айги*, 86-89, Чебоксары: ЧГИГН, 2020) ❸ 5 学会報告・学術講演 ▼ Topography of Adaptation: Native Domestic Animals in Sakha (Yakutia) and the Natural Environment, International Scientific Summer School - 2020 “Sustainable Development of Rural Areas under Conditions of Global Climate Change,” Arctic State Agrotechnological University (2020.7.8)

仙石学 ❶ 1 学術論文 ▼ ポピュリスト政権の経済政策：ヴィシエグランド諸国の比較から『比較経済研究』57(2):15-24 (2020) ▼ 深まる亀裂？：法と正義の政治がもたらしたもの(仙石学編『転換期のポピュリズム？』[スラブ・ユーラシア研究報告集 No. 13] 11-25, 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター, 2020) ❷ 2 その他業績(論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ スロバキアの年金制度『年金と経済』39(2):168-171 (2020) ❸ 3 著書 ▼ (編著)『転換期のポピュリズム？』[スラブ・ユーラシア研究報告集 No. 13] 76 (北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター, 2020) ▼ 『中東欧の政治』216 (東京大学出版会, 2021) ❹ 4 その他業績(著書形式) ▼ 現代ポーランドの光と影：転機としての2015年？(渡辺克義編『ポーランドの歴史を知るための55章』301-307, 明石書店, 2020)

田畑伸一郎 ❶ 1 学術論文 ▼ A Note on the Growing International Reserves of Russia, *Eurasian Geography and Economics*, Published online (2021.3.1) [https://doi.org/10.1080/15387216.2021.1892501] ▼ (with N. Otsuka, M. Goto, M. Takahashi) Economy, Society and Governance in the Arctic: Overview of ArCS Research Project in the Field of Humanities and Social Sciences (2015-2020), *Polar Science*, 27:100600 (2021.3) [https://doi.org/10.1016/j.polar.2020.100600] ▼ ロシアの統計制度の特徴と発展(久保庭真彰ほか編『アジア長期経済統計10 ロシア』31-38, 東洋経済新報社, 2020) ▼ (田畑朋子と) 財政(久保庭真彰ほか編『アジア長期経済統計10 ロシア』135-154, 東洋経済新報社, 2020) ▼ 現代ロシアの国民経済計算(久保庭真彰ほか編『アジア長期経済統計10 ロシア』223-227, 東洋経済新報社, 2020) ▼ 想定通りの低成長となった2019年のロシア経済『ロシアNIS調査月報』65(5):2-25 (2020) ❷ 2 その他業績(論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ (with N. Otsuka) The Arctic and Asia (H. Takakura et al. eds., *Permafrost and Culture: Global Warming and the Republic of Sakha (Yakutia), Russian Federation* [Center for Northeast Asian Studies Report 26], 51-54, Sendai: Tohoku University, 2021) ▼ ロシア経済と大恐慌『ポストーク』[NPO 法人ロシア極東研機関誌] 42:7-9 (2020.7.10) ❸ 5 学会報告・学術講演 ▼ (with Masanori Goto) Proposal of Joint Research on Socio-economic Development in Municipal Districts of the Sakha Republic, Northern Sustainable Development Forum, Yakutsk (online) (2020.9.30) ▼ Presence of Yamalo-Nenets Autonomous Okrug and Sakha Republic in the Russian Economy, 52nd Annual Convention of Association for Slavic, East European and Eurasian Studies (ASEEES), Washington DC (Online) (2020.11.6) ▼ People and Community in the Arctic: Overview of ArCS Project in the Field of Humanities and Social Sciences, 11th Symposium on Polar Science, Tokyo (online) (2020.12.1)

兎内勇津流 ❶ 1 学術論文 ▼ ヴァシーリー・ボルディレフと日本：一九一九年滞日期を中心に『ロシア史研究』105:3-22 (2020) ▼ ゲンナージー・ネヴェリスコイのアムール調査(探検)と幕末の日本(牧

野元紀編『ロマノフ王朝時代の日露交流』260-287, 勉誠出版, 2020) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼ パネル「新史料から見直すシベリア出兵」『ロシア史研究』104:84-86 (2020) ▼ (及川琢英と) 立花小一郎回顧余録(三) 大正9年5-7月(翻刻と註解)『近現代東北アジア地域史研究会ニューズレター』31:50-80 (2020) ▼ 杉浦新次郎旧蔵大正・昭和戦前期軍馬・馬政写真帖(オンライン画像データベース)(2021.3) ▼ (松重充浩〔校註〕、兎内勇津流〔解題〕) 荒木貞夫の口述記録:「シベリア出兵」について『近代中国研究彙報』42:1-46 (2020) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ アメリカの史料から北サハリン占領を考える, 函館日口交流史研究会・はこだて外国人居留地研究会合同例会, 函館市 (2020.8.25) ▼ 沿海州ゼムストヴォ参事会臨時政府 (1920年) 試論, 第8回シベリア出兵史研究会(オンライン)(2021.3.29)

中澤拓哉 ㊦ 1 学術論文 ▼ 「モンテネグロ語」の起源: 社会主義ユーゴスラヴィアにおけるモンテネグロの言語をめぐる論争と言語イデオロギー (1960-1980年代) 『SLAVISTIKA』35:561-573 (2020) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ 魔女は細部に宿る: 『ストライクウィッチーズ』の世界観に関する一試論『まぐまPB』12:16-26 (2021) (5) その他 ▼ 会員近況報告『エスニック・マイノリティ研究』4:35 (2021) ㊦ 4 その他業績 (著書形式) ▼ 言語の数えかた: 旧ユーゴスラヴィア諸国におけるセルビア・クロアチア語の事例から考える(エスニック・マイノリティ研究会編『多様性を読み解くために』147-159, 東京外国語大学海外事情研究所, 2020) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ 社会主義ユーゴスラヴィアにおける「民族文化」の創出: 1960年代後半から1970年代初頭にかけてのモンテネグロを事例として, 第70回日本西洋史学会大会 (2020.12.12)

長縄宣博 ㊦ 1 学術論文 ▼ Гражданская война как цивилизаторская миссия: Роль татарских политработников Красной Армии в Туркестане (*Гражданская война в России: Жизнь в эпоху социальных экспериментов и военных испытаний, 1917-1922, 417-435, СПб.: Нестор-История, 2020*) ▼ Tatars and Imperialist Wars: From the Tsar's Servitors to the Red Warriors, *Ab Imperio, 1:164-196 (2020)* (Honorable Mention in the Ab Imperio Award 2020 for the Best Study in New Imperial History and History of Diversity in Northern Eurasia, Up to the Late Twentieth Century) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼ Хакимов в Бухаре: уроки «освобождения Востока», *Посол мира. Электронная газета Управления по делам архивов и Национального архива Республики Башкортостан, 9-10, https://cloud.mail.ru/public/3zyJ/vmrevjqLn* ▼ 文明化の使命としての内戦: 赤軍ムスリム兵士と中央アジア『権力と社会統合: 歴史学フォーラム2019の記録』1-19 (2020.8) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ Official Aliens: Tatars' Involvement in the Central Asian Revolution, SHS Weekly Colloquium, Institute for Advanced Study, Princeton (online)(2021.3.8) ▼ Making an Anti-imperialist Empire: Revolutionary Russia and the Muslim World, Jordan Center Seminar, NYU Jordan Center for the Advanced Study of Russia, New York (online)(2021.2.16) ▼ Reconfirming the Khalidiyya Ties: 'Abd Allāh al-Ma'ādhī on his Hajj in 1910, Расулевские чтения: ислам в истории и современной жизни России, Челябинск (online) (2020.11.12) 以下に収録: *Вестник Челябинского государственного университета, 58:21-25, Философские науки (2020)* ▼ Бухарская революция глазами татар: внутренняя борьба и внешние факторы (британские, афганские и турецкие), Между Российской империей и СССР: Центральная Азия в международной геополитике (к 100-летию БНСР и ХНСР), Институт всеобщей истории РАН, Москва (online)(2020.10.28)

野町素己 ㊦ 1 学術論文 ▼ (with Aleksandra Salamurović) Glagolitic Script in Media: between Ritualization and Innovation (Gabrielle Schubert et al., eds, *Von der Wiederholung zum Ritual Reizante Prozesse in den Sprachen und Kulturen südosteuropäischer Gesellschaften, 229-250, 2020*) ▼ Linguistic Ideology and the Art of Re-Edition: On the Second Edition of Ioann Rajič's *History of Various Slavic Peoples* (1823), *Naš jezik, L/2:715-725 (2020)* ▼ How do Russians Verbalize the Art of Kissing? An Appendix to Jurij D. Apresjan's Analysis of the Verb *Celovat* "to kiss," *Proceedings of the V. V. Vinogradov Russian Language Institute, 2:241-256 (2020)* ▼ Neopublikovannyj Očerok makedonskogo literaturnogogo jazyka Samuila B. Bernštejna (M. Nomachi and S. Kiyosawa, eds., *Grammatika v obščestve, obščestvo v grammatike: issledovanija po normativnoj grammatike slavjanskix jazykov, 271-303, Moscow: Izdatel'stvo JaSK, 2021*) ▼ (with Shiori Kiyosawa) Vvedenie (M. Nomachi and S. Kiyosawa, eds., *Grammatika v obščestve, obščestvo v grammatike: issledovanija po normativnoj grammatike slavjanskix jazykov, 11-18, Moscow: Izdatel'stvo JaSK, 2021*) ㊦ 3 著書 ▼ (co-edited by Shiori Kiyosawa) *Grammatika v obščestve, obščestvo v grammatike: issledovanija po normativnoj grammatike slavjanskix jazykov, 303 (Izdatel'stvo JaSK, 2021)* ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼ 「方言」から「言語」へ: カシュブ語の標準化の歴史(渡辺克義編『ポーランドの歴史を知るための55章』378-379, 明石書店, 2020) ▼ 燻り続けるブルガリア語・マケドニア語問題は解決するか: 最近の論争とその背景『スラブ・ユーラシア研究センターウェブサイト: 研究員の仕事の前線』[https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/center/essay/20201025.pdf] 1-24 (2020) ㊦ 5 学

会報告・学術講演 ▼ (Keynote lecture) Archaism or Innovation? One Particular Usage of the Locative and Accusative Cases in Burgenland Croatian, *Jezyk w regionie, Region w jezyku*. Konferencja IV (online), Poznań (2020.11.18) ▼ (Keynote lecture) Evolution of Samuil B. Bernštejn's Views of Two "Slavistic Questions," LIX skup slavista Srbije (online), Belgrade (2021.1.28)

東島雅昌 ㊦ 1 学術論文 ▼ Blatant Electoral Fraud and the Value of a Vote, *Japanese Journal of Political Science*, 22:1-14 (2021) ▼ (with Yu Jin Woo) Political Regimes and Refugee Entries: Motivations behind Refugees and Host Governments, *University of Gothenburg, V-Dem User's Working Paper Series*, 34:1-59 (2020) ▼ (with Cristina Bodea and Carolina Garriga) Central Bank Independence and the Fate of Authoritarian Regimes (Ernest Gnan and Donato Masciandaro, eds., *Populism, Economic Policies, and Central Banking* [SUERF Conference Proceedings], 1:161-179, 2020) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ 「解説」変貌する権威主義 適応する独裁者 (エリカ・フランツ、上谷・今井・中井訳『権威主義：独裁政治の歴史と変貌』233, 白水社, 2021) (5) その他 ▼ 共著論文という知的営為について『日本比較政治学会ニューズレター』46:11-12 (2021) ▼ (with Anna Lührmann, Nils Düpont, Yaman Berker Kavasoglu, Kyle L. Marquardt, Michael Bernhard, Holger Döring, Allen Hicken, Melis Laebens, Staffan I. Lindberg, Juraj Medzihorsky, Anja Neundorf, Ora John Reuter, Saskia Ruth-Lovell, Keith R. Weghorst, Nina Wiesehomeier, Joseph Wright, Nazifa Alizada, Paul Bederke, Lisa Gastaldi, Sandra Grahm, Garry Hindle, Nina Ilchenko, Johannes von Römer, Steven Wilson Daniel Pemstein, and Brigitte Seim "Codebook Varieties of Party Identity and Organisation (V-Party) V1, Varieties of Democracy (V-Dem) Project (2020) " [https://www.v-dem.net/en/data/data/v-party-dataset/] ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ (with Yu Jin Woo) Political Regimes and Refugee Entries, *Asian Online Political Science Seminar Series (AOPSSS)* (2020)

本田晃子 ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ 亡霊建築論 6：ガラスのユートピアとその亡霊『ゲンロン11.5』60-70 (2020) ▼ ソ連団地の憂鬱『ゲンロン11』248-262 (2020) ▼ 革命と住宅 (1) ドム・コムーナ：社会主義的住まいの実験 (前篇)『ゲンロンβ 57』デジタル媒体のため頁数なし (2021) ▼ 革命と住宅 (2) ドム・コムーナ：社会主義的住まいの実験 (後篇)『ゲンロンβ 58』デジタル媒体のため頁数なし (2021) (3) 書評 「生活の総合的構成」河村彩『ロシア構成主義：生活と造形の組織学』『表象』14:176-179 (2020)

宮崎千穂 ㊦ 1 学術論文 ▼ <マラズ> からロシア帝国の<梅毒>へ：一九世紀後半の中央アジアの風土性梅毒への医療実践と統計学・地誌学・民族誌学『ロシア史研究』106:104-131 (2021) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ 2019年の歴史学界：回顧と展望 (近代—ロシア・東欧・北欧)『史学雑誌』129(5):356-360 (2020) (2) 研究ノート等 ▼ 井上靖の中央アジアへの旅 (1965) とソ連のインバウンド観光：日本人知識人の“西域”への憧憬と社会主義プロパガンダとの間で『日本国際観光学会論文集』28:121-132 (2021) (5) その他 ▼ (コラム) 梅毒 (秋田茂、脇村孝平責任編集『人口と健康の世界史』83-87, ミネルヴァ書房, 2020) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ 井上靖の“西域”の旅とソ連の国際観光, 日本国際観光学会第24回全国大会 (オンライン) (2020.10.17) ▼ (E・エルムロドフと) ウズベキスタン共和国における新型コロナウイルス感染症対策, グローバルヘルス合同大会2020大阪 (Joint Congress on Global Health 2020 in Osaka) (オンライン) (2020.11.1-3)

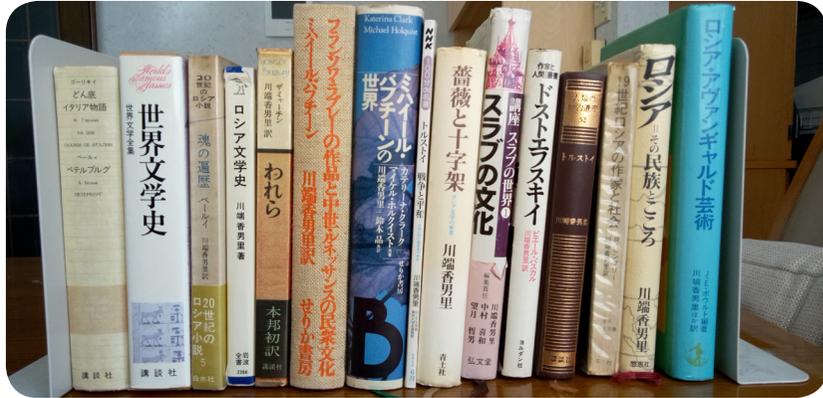
みせらねあ

◆ 川端香男里先生とSRC ◆

このたび、東京大学名誉教授でスラブ・ユーラシア研究センター名誉研究員の川端香男里先生の訃報が届きました。ご病気で療養中のところ、2月3日、老衰で亡くなられたということです。われわれのセンターにとって大変貴重な存在であった川端先生のご逝去を惜しみつつ、そのご恩についての記憶を新たにすため、以下センターに関連した先生のご活動の概略を振り返らせていただきます。

スラブ文学、比較文学の領域で大きな業績を上げられ、ロシア・東欧学会代表理事 (1991-

2000)、日本ロシア・東欧研究連絡協議会(JCREES)代表幹事(1998-2005)、日本ロシア文学会会長(2001-2005)、トルストイ協会会長(1996-)、日本18世紀ロシア研究会会



川端香男里先生の御著書から(望月哲男所蔵)

長(2005-2013)などを歴任されて、日本のスラブ研究を長くリードしてこられた川端先生は、センターの活動及びその成長にも、かけがえのない役割を果たしていただきました。

川端先生は、1963年に北海道大学文学部専任講師に着任され、その後モスクワ大学派遣留学などを経て、1969年に東京大学教養学部へ移られました。そうした経緯から、当時北海道大学法学部附属スラブ研究施設として存在していたセンターの前身組織とも近い関係にありました。1964年にスラブ研究施設に助手として着任されたロシア史の外川継男先生とは、高校時代からのご学友と伺っています。ちなみに手元の『スラブ研究センターの40年』(北大スラブ研究センター、1995)によれば、川端先生は1966年7月スラブ研究施設夏期研究報告会において、「18世紀後半のロシア文学に対する外国の影響：主にフランス文学との関連について」という研究発表をされており、おそらくこれが先生とセンターのご縁の公式的な始まりといえそうです。

その後、センターがスラブ研究センターという名称の学内共同利用施設だった1980年代前半から、川端先生はセンターの学外共同研究員を何期も(1981-1983、1986-1994)つとめられました。1980年代後半、ペレストロイカに端を発したスラブ世界の変容とその世界史的な意味を踏まえて、日本にこの地域の研究・情報収集・国際交流・専門家教育のための全国規模のセンターを作ろうという運動がセンターを中心に始まった時、当時東京大学大学院人文科学研究科で露語露文学専攻主任をされていた川端先生は、文化研究や国際交流の立場から力強くこれをサポートしていただきました。1987年10月に神田学士会館でおこなわれた『スラブ研究推進の方法検討会』(伊東孝之座長)では、諸学会や大学を代表する14名のパネリストの一人として川端先生も国際交流の観点からご発言くださり、検討の成果が参加者の連名による「スラブ地域雑誌センター設立に関する要望書」「日ソ文化交流協定に基づく国費交換留学生制度に関する要望書」となって結実しました。全国センターとしての活動にチャレンジし始めたセンターの企図を、各地の大学や関連学会や政府の関連機関へとつなぎ、専門家にも学生にも社会にも有益な大きな流れに育ててくださった、貴重な橋渡し役のお一人でした。

センターが全国共同利用施設に改組された1990年以降、川端先生は運営委員(1990-1993年度)、客員教授(1994-1995年度)として、直接センターの運営と研究活動にご参画いただきました。

センター40周年を記念して1994年から出版された『講座スラブの世界』(原暉之編集代表:弘文堂)では、中村喜和一橋大学名誉教授、センターの望月哲男とともに、第1巻『スラブの文化』(1996年刊行)の編集をご担当いただきました。センターの初めての分野横断的・総合的な共同研究となった1995-1997年度の重点領域研究『スラブ・ユーラシアの変動』(皆

川修吾代表)では、7名からなる総括班の一員として、主として文化面の研究を統括・管理していただきました。

この重点領域研究の経験と成果を踏まえて作られた国内関連学会の連携組織が、1998年に発足した日本ロシア・東欧研究連絡協議会(JCREES)で、川端先生はその初代表幹事として、事務局を務めるセンターとの協力の下、国内の諸分野のスラブ研究学会が密に連携し合い、さらに国際学会との関係を強化するためのシステムづくりをリードしていただきました。日本のスラブ研究者が世界規模の国際中欧・東欧研究学会(ICCEES)の活動に積極的に関与するとともに、東アジアの研究者集団と新しい協力関係を築いていくという構想がこうした枠組みを得て実現され、その結果が2009年以降のスラブ・ユーラシア研究東アジア大会の定期的な開催、さらには2015年の国際中欧・東欧研究学会(ICCEES)世界大会の幕張での開催となって現れることになります。川端先生はここでもまた、木村汎教授や松里公孝教授など、センターの代々の研究者たちが育んできた夢の実現を、全国の研究者集団を代表する形で、力強く支えていただきました。

川端先生がセンターの活動に深く関与された90年代は、変動期のスラブ地域研究の盛期で、従来の常識を超えた概念や価値観が求められた時代でした。文化研究においても、目まぐるしく出現する新しい現象を追いかけてながら、そうしたものを分析する手法の模索がおこなわれていましたが、先生はご専門の文化理論や比較文化学の立場から、折に触れて普遍性と汎用性に富んだ研究の枠組みを示唆していただきました。

例えば先述の『スラブの文化』所収の論考「スラブ文化における土着と影響」の中でも、いわゆる土着と呼ばれている文化が外来の影響の所産であるという可能性を指摘すると同時に、スラブ地域における土着文化と外来文化の弁証法的な展開を、スラブ地域内部での民族間関係や、キリスト教および近代の世俗文化の受容にまつわるスラブ・西欧の関係に見るといふ、壮大な試みをされています。これはもちろん komunizm の受容ともかかわる問題ですが、ともすれば社会主義体制の以前と以後、あるいはモダンとポストモダンといった限定された枠組みにとらわれがちだった変動期のスラブ文化研究にとって、こうした通史的な議論がもたらしてくれる視野の拡大は、きわめて貴重でした。

もちろん、より狭義のご専門である18世紀ロシア研究やロシア・モダニズム文学研究、フォルマリストやミハイル・バフチン、ユーリー・ロートマンなどを含む文化・文学理論研究、トルストイやドストエフスキーの比較文学的研究などから導き出される豊富な知見、深い見識は、われわれのような後の世代の研究者にとって極めて刺激的であり、そうしたものを背景に、センターの研究報告会や国際シンポジウムで川端先生が報告者や討論者として果たして下さった役割の意味は、計り知れません。

個人的に強く印象に残っているのは、先生が若い頃お勤めになった北海道大学に、故郷に対するような愛着を持たれていたことで、とりわけセンターの外川継男教授や、情報資料部の秋月孝子助教授、文学部露文学科の灰谷慶三教授、栗原成郎教授など、昔なじみの方々と同席されるときには、青年のように快活なご様子を見せていらっしゃいました。われわれとしても、極めてご多忙な川端先生を頻繁に「内地」から札幌の催し物にお呼びするのは気が引けるところもあったのですが、先生はいつも二つ返事でお引き受けくださいました。一度などは足を骨折された直後に、ギブスに松葉杖という姿で札幌駅に降り立たれたことがあり、車で会議場や宴会場へとお送りしながら、ご自分の身を顧みずに役割を果たそうとされるその責任感とご厚意の表明に、感謝の言葉も見つからぬ思いを味わいました。

きわめて多岐にわたる川端先生の当センターに対するご貢献は、筆舌に尽くせるものではありませんが、以上若干の記録と思い出を記させていただきます。

あらためて川端香男里先生の御恩に感謝し、追悼の言葉といたします。[望月哲男・安達]

◆ センターの役割分担 ◆

2021年度のセンター教員の役割分担は以下の通りです。[岩下]

センター長..... 岩下
副センター長..... ウルフ
拠点運営委員会委員..... 岩下/宇山/仙石/長縄/野町

【学内委員会等】

教育研究評議会、部局長等連絡会議、部局長等意見交換会..... 岩下
教務委員会..... 岩下
図書館委員会..... 兎内
国際担当教員..... ウルフ
RJE3 学内運営委員会およびカリキュラム検討専門委員会..... 田畑/安達
低温科学研究所拠点運営委員会..... 岩下
北極域研究センター運営委員会..... 田畑
男女共同参画委員会..... 岩下
社会科学実験研究センター運営委員会..... 田畑
サステナブルキャンパス推進員..... 青島
ハラスメント予防推進員..... 長縄
広報担当者..... 宇山
共同利用・共同研究拠点アライアンス運営委員..... 長縄
アイヌ・先住民研究センター運営委員（新設）..... 青島
情報基盤センター協議員..... 岩下
情報セキュリティ委員会委員..... 宇山
人事委員会委員..... 岩下

【学外委員会等】

国立大学附置研究所・センター会議..... 岩下
国立大学共同利用・共同研究拠点協議会..... 岩下
JCREES 事務局..... 岩下/諫早
地域研究コンソーシアム理事..... 岩下
地域研究コンソーシアム運営委員..... 青島/長縄
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所拠点運営委員..... 宇山
京都大学東南アジア地域研究研究所運営委員..... 岩下
ICCEES 情報..... 野町

【センター内部の分担】

大学院講座主任..... 仙石
教務委員..... 青島
入試委員..... 仙石
総合特別演習担当..... (前期) 安達 / (後期) 青島
全学教育科目責任者..... 青島
全学教育科目総合講義..... 田畑/後藤
全学教育科目演習..... 未定
将来構想..... 宇山/仙石/長縄/野町
点検評価..... 長縄/宇山

夏期シンポジウム.....	安達／岩下／諫早／非常勤研究員*
冬期シンポジウム.....	宇山／諫早／非常勤研究員*
図書.....	田畑／兎内
情報・広報.....	宇山／諫早／大須賀
予算.....	田畑
共同利用・共同研究公募.....	長縄
客員教員.....	青島
外国人研究員プログラム.....	安達／ウルフ／大須賀
サーヴィン.....	宇山
メルクソー.....	岩下
ラドチェンコ.....	ウルフ
デブラシオ.....	安達
アブドゥラスロフ.....	長縄
オシポフ.....	宇山
オレーニナ.....	安達
ザハロフ.....	田畑
非常勤研究員.....	仙石
中村・鈴川基金.....	仙石
公開講座.....	安達
公開講演会.....	長縄／諫早／非常勤研究員*／大須賀
専任研究員セミナー（助教・非常勤研究員セミナーを含む）.....	宇山
その他研究会・講演会.....	安達／諫早／非常勤研究員／大須賀
研究所一般公開.....	未定
博物館展示.....	岩下
NIHU 北東アジア（NIHU セミナー、HP、オンライン報告書）.....	井上
UBRJ（HP、『境界研究』）.....	岩下
その他諸行事企画.....	安達／諫早／非常勤研究員
雑誌編集委員会.....	安達／宇山／ウルフ／長縄／野町／青島
<i>Acta Slavica Iaponica</i>	野町／ウルフ／大須賀／青島
『スラヴ研究』.....	長縄／大須賀／安達
スラブ・ユーラシア叢書、SES、研究報告集.....	安達／大須賀
ニューズレター和文（メルマガ・HP コンテンツ）... 宇山／（岩下）／大須賀	
ニューズレター欧文（メルマガ・HP コンテンツ）ウルフ／（岩下）／大須賀	

*非常勤研究員2名で担当するなかでの代表者を示す。2名の名前がある場合は輪番制。

◆ **Грамматика в обществе, общество в грамматике: Исследования по нормативной грамматике славянских языков (Издательский дом ЯСК) の刊行** ◆

2021年3月に標記の研究論集が、ロシアの著名な人文学研究書出版社JaSKから刊行されました。本書はスラブ諸語を分析対象とし、標準語文法の形成とその社会的な役割と変容について多角的に分析したもので、そのもとになったのは2018年秋におこなわれたセンターとモスクワ大学文学部スラブ言語文化学科との共同研究会です。研究会を組織したのは筆者とコンスタンチン・リファノフ教授（モスクワ大学、写真向かって左端）ですが、編集作業は筆者と清沢紫織氏（日本学術振興会特別研究員PD）がおこないました。本書には安達研究員（セ

ンター)の論文も掲載されており、また表紙のデザインは笹谷氏(センター)が担当されました。内容は次のリンクをご覧ください。

https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/books_new/index-books.html

収録論文は分野的にばらつきが否めませんが、力作も多く、また巻頭言は世界的に著名なスラブ語学者でロシア学士院会員のスベトラナ・トルスタヤ教授がお引き受け下さった

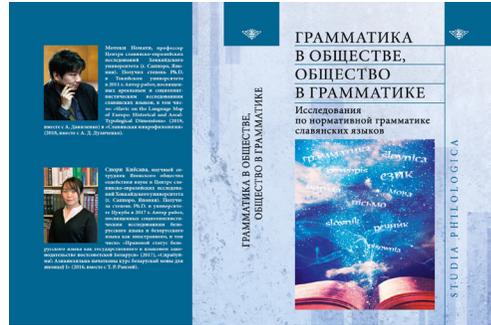
のは大きな名誉でした。なお、本書を担当したJaSK社のマリヤ・コロリョワ氏とベラ・ストリャロワ氏は、休日返上、深夜・早朝にも作業をしてくださいました(筆者とお二人の間で合計218通のメールが飛び交いました)。コロナ禍でロシアからの郵送で期日通りに納品するのが困難であったため、ゲラ最終版まではロシアで、印刷は日本でおこないました。JaSK社との契約は複雑で、これはセンター事務担当の山本氏と中嶋氏のご尽力なくして実現しませんでした。この場をお借りしてお礼申し上げます。[野町]



モスクワ大学のスラブ学者たちと(写真:安達大輔氏)

◆ 仙石学『中東欧の政治』(東京大学出版会、2021年)の刊行 ◆

社会主義体制が存在した旧東欧地域に関してはさまざまな地域区分が存在しますが、その一つとして独立前にプロイセン、ハプスブルク、およびロシア帝国の支配下にあった地域と、オスマン帝国の支配下にあった地域を区分し、前者を中東欧、後者をバルカンまたは南東欧と称することがあります。本書はこの区分による中東欧諸国の体制転換から30年の政治についてまとめたものですが、この地域の中でもスロヴェニアとクロアチアは歴史的経緯に違いがあることから、本書では中東欧諸国のうちバルト諸国とヴィシエグラード諸国における政治の展開を主たる対象としています。本論では各国における政党政治の展開を軸として、30年間の政党政治の形の変容、政党政治と経済政策の関係、および政党政治と福祉・社会保障との関係についての議論をおこなっています。この試みがどこまで成功しているかということについては読者の判断に委ねるしかありませんが、日本語ではこの地域の政治に特化した書籍はほとんど存在しないことから、この本により東欧地域の政治・経済に関心を持つ人が出てくることを期待しています。[仙石]



Political Change and Party Politics in Central Eastern Europe

中東欧の政治

仙石学一著



東欧革命30年を経て

民主化・市場経済化を遂げ、EU加盟を実現しながら、世界金融危機・欧州難民危機後のデジタル化の自衛に苦戦する中東欧諸国の政治の全体像に迫る。

東京大学出版会

目 次

研究の最前線.....	1
百瀬基金の設立・百瀬フェローシップの募集開始／2021年度夏期シンポジウム《不確実性の時代のスラブ・ユーラシア研究：対話と再検討》開催のお知らせ／ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン スラブ東欧研究学院 (UCL SSEES) との部局間交流協定締結／ポルタワ国立教育大学との国際会議共催／共同研究員／2021年度外国人招へい教員決定／専任・助教・非常勤研究員セミナー／研究会活動	
人事の動き.....	14
研究員の異動／事務職員の異動／2021年度の客員教授・准教授	
中口関係のいま：大国同士の地政学的な駆け引き.....	15
by ディビッド・ウルフ	
明治・大正期の外国地名表記を訪ねて.....	17
by 中澤拓哉	
集中講義「古気候データは歴史研究にどう活用できるか：文理協働の実現に向けて」.....	21
by 諫早庸一	
学界短信.....	25
学会カレンダー	
大学院だより.....	25
編集室だより.....	27
ACTA SLAVICA IAPONICA / EURASIA BORDER REVIEW / 『境界研究』	
会議（2021年4～5月）.....	27
誰が何をどこで.....	28
みせらねあ.....	32
川端香男里先生とSRC／センターの役割分担／ <i>Грамматика в обществе, общество в грамматике: Исследования по нормативной грамматике славянских языков</i> (Издательский дом ЯСК) の刊行／仙石学『中東欧の政治』（東京大学出版会、2021年）の刊行	

2021年6月20日発行

編集責任	大須賀みか
編集協力	宇山智彦
発行者	岩下明裕
発行所	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 060-0809 札幌市北区北9条西7丁目 Tel.011-706-3156、706-2388 Fax.011-706-4952 インターネットホームページ： http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/
